

『南山神学』30号(2007年2月) pp. 77-121.

## トマス・アクィナスにおける分離した魂の認識(2)

『定期討論集 デ・アニマ』第十五問題

「身体から分離した魂は知性認識することができるか」

解題, 翻訳と註

井上 淳

### ・ 解題

『定期討論集 デ・アニマ』第十五問題では<sup>1</sup>, 「身体から分離した魂は知性認識することができるか」という問題が取り扱われている。これに先立つ第十四問題においてトマスは, 人間の魂の不死性について論じ, 人間の知性的魂が身体からの分離後も消滅することなく存続することを論証した<sup>2</sup>。人間の魂は身体の形相であるとされるが, 身体が滅ぶ時に共に消滅しないのは, トマスによれば,

---

<sup>1</sup> トマス・アクィナスの『定期討論集 デ・アニマ』( *Quaestiones disputatae de Anima* 以降 *QDA* と略記する) の執筆年代について, Leonina 版の編者である B.C. Bazán は, *QDA* の執筆は 1266-1267 年であり, *Summa theologiae* (以降 *ST* と略記する) I, qq. 75-89 (1267-1268) よりも少し前の著作であるとしている。 *Opera Omnia iussu Leonis XIII P.M. edita*, tomus 24-1, *Quaestiones disputatae de anima*, p. 22\*および p. 25\*を参照。 Cf. Jean-Pierre Torrell, *Initiation à saint Thomas d'Aquin*, 2e édition (Éditions de Cerf Paris, 2002), p. 235, 616 (英訳は, Jean-Pierre Torrell, *Saint Thomas Aquinas*, vol. 1: *The Person and His Work*, Revised Edition, Translated by Robert Royal, Washington, DC: The Catholic University of America Press, 2005, pp. 161-162, 427-428)。執筆年代については, 藤本温「トマス・アクィナス『定期討論集 魂について 第一問題』翻訳: 人間の魂は「形相」でありかつ「この或るもの」でありうるか」『プラトン主義の受容と変容を通じての古典の普遍性の研究: 課題番号 14310228 研究成果報告書』(2006年) p. 87 をも参照されたい。

<sup>2</sup> *QDA*, q. 14, cor. を参照。邦訳は拙稿, 井上淳「トマス・アクィナスにおける分離した魂の認識」『定期討論集 デ・アニマ』第十四問題『人間の魂の不死性について』翻訳と註解」を参照。

人間の魂が形相と質料との複合体としてのみ存在を有するような形相なのではなく、それ自体が存在を有する自存的な形相( *forma subsistens* )だからである<sup>3</sup>。

それでは、人間の魂が自存的な形相であることは、どのようにして論証されるのか。トマスによれば、それは人間の魂が知性認識能力を有していることによる。人間の魂は、身体器官に依存することのない、固有の知性的なはたらきを有する。それ自体として固有のはたらきを有するものは、それ自体として存在を有するのであるから<sup>4</sup>、それにより、魂がそれ自体として存在を有する自存的な形相であり、身体からの分離後も、それ自体として存続することが確証されるのである<sup>5</sup>。

このようにトマスは、人間の魂の不可滅性の根拠を、魂が知性認識のはたらきをその固有のはたらきとして有していることに置いている。人間の魂は、身体から分離した後も、知性認識というそれ自体としての固有のはたらきを持つがゆえに、存続するのである。

さてそれでは、人間の魂は、身体から分離した後に、どのような仕方を知性認識を行うのであろうか。知性的のはたらきそれ自体は身体器官によって遂行されるのではないとは言え、魂はこの世にあってはやはり、知性認識のために身体の感覚器官の助けを必要としていることをトマスは認めている。アリストテレスの説を承認し、人間の魂は感覚を通して得られた表象像なしには知性認識

<sup>3</sup> *QDA*, q. 14, cor. ( Leonina, uersus 179-181 ) : 「もし存在を自ら有するような形相があれば、その形相は必然的に不可滅的である」。

<sup>4</sup> 「自らに固有のはたらきを有することのない実体は存在しない」( *Nulla est substantia sine propria operatione.* )。この公理は Damascenus に帰されている。SSS II, d. 19, q. 1, a. 1, arg. 6; SSS IV, d. 50, q. 1, a. 1, s. c. 1; *QDA*, q. 19, s. c. 3 を参照。Cf. Damascenus, *De fide orthodoxa*, II, 23, PG col. 950; E.M. Buytaert ed., (Franciscan Institute Publications, Text Series N. 8, Franciscan Institute, 1955), c. 37, 1, p. 142, u. 9-10: “Impossibile enim substantiam expertem esse naturali operatione.”

<sup>5</sup> *QDA*, q. 14, cor. ( Leonina, u. 216-219 ) : “Relinquitur ergo quod principium intellectuum quo homo intelligit sit forma habens esse. Vnde necesse est quod sit incorruptibilis.”( 「人間がそれによって知性認識するところの知性的根源は、存在を自ら有する形相であることが帰結する。それゆえ、それが不可滅的であることは必然的である」 )。

することができないとしているのである<sup>6</sup>。しかし身体から分離すると、魂は身体と共に感覚器官も表象像も失ってしまう。そのような状態で、魂はどのようにして知性認識することができるのであろうか。第十五問題において取り扱われているのはこの問題についてであり、トマス自身が主文の冒頭に述べているように、この問題の難しさはまさにこの点にある。

「この世の状態において現に我々の魂が知性認識のために感覚を必要としているということ、このことがこの問題に困難をもたらしている。」<sup>7</sup>

以下、第十五問題においてトマスが提示している答えを概観してみよう。トマスはこの問題を解くにあたって、まず、感覚の必要性に関する二つの説、すなわちプラトン主義者たちの説とアヴィセンナの説を検討している。

プラトン主義者たちは、感覚は魂の知性認識のために、自体的 (per se) ではなく、ただ付帯的 (per accidens) に必要とされるだけであるとした。彼らによれば、魂は生得的に既に知識を有しているのだが、身体との合一のせいでそれを忘れてしまっている。感覚は知識を生じさせるのではなく、単に魂に刺激を与えて、その知識を思い出させるに過ぎないのである<sup>8</sup>。

---

<sup>6</sup> Aristoteles, *De anima* III, 431a16-17; *QDA*, q. 15, cor. (Leonina, 268-270) を参照。アリストテレスのこの公理は次の箇所にも取り上げられている: *QDA*, q. 14, arg. 14; *QDA*, q. 15, arg. 1; *QDA*, q. 16, s. c. また *STI*, q. 88, a. 1, cor.には次のように述べられている: “Sed secundum Aristotelis sententiam, quam magis experimur, intellectus noster, secundum statum praesentis vitae, naturalem respectam habet ad naturas rerum materialium; unde nihil intelligit nisi convertendo se ad phantasmata. . . .” (「だが、アリストテレスの所説の方が我々の経験するところにかなっているに從えば、我々の知性は、現世の生の状態におけるかぎり、質料的事物の本性に対して本性的な関わりを有しているのであり、我々の知性が、(中略)表象へ自らを向けることによってでなければ何ものをも認識しないものであるものこのゆえである」大鹿一正 訳『トマス・アキナス 神学大全』第6冊 創文社、1969年)。

<sup>7</sup> *QDA*, q. 15, cor. (Leonina, u. 203-206)

<sup>8</sup> *QDA*, q. 15, cor. (Leonina, u. 209-231) を参照。

一方、アヴィセンナは、すべての可知的形象は離在する能動的知性実体から流出するとし、魂がその知性実体へと自らを向けてそこから諸形象を受け取るよう態勢づけられるためにのみ、感覚のはたらきは役立つのだとした。つまりこの説では、魂は、それによって知性認識するところの可知的形象を、能動的知性実体から受け取るのであって、感覚を通して可感的事物から獲得するのではないのである<sup>9</sup>。

これらの説は、感覚および表象像は人間の魂が知性認識するために、ある限定的な意味では役立つが、人間の知性のうちに知識を生じさせる直接的な要因ではないとするものである。そしてそれゆえ、もしこれらの説に従うならば、分離した魂の認識についての問題は容易に解決されるであろう。なぜなら、魂は感覚を通して可知的形象を獲得するのではなく、すでに生得的に有しているか、あるいは離在的な知性実体から受け取るのであるから、たとえ感覚器官や表象像がなくても、魂は本性的に知性認識することが可能なはずだからである。いやむしろ、身体から完全に分離した方が、魂はより自由に知性認識することができるようになるであろう<sup>10</sup>。

しかしながら、トマスはこれらの説を斥けている。なぜなら、プラトン主義者たちの説では、魂が身体とひとつになることに何ら積極的な理由が見出せず、むしろ、身体との合一は魂のためにならず、その自然本性にも反することになってしまうからである。また、アヴィセンナの説では、魂は能動的知性実体に自らを向けるだけで形象を受け取ることができるというのであるから、魂はそれによってあらゆる知識を全て獲得できてしまうことになるであろうが、これはトマスによれば、経験的な事実に反している。例えば、生まれつき盲目の人が色彩についての知識を得ることができないように、人はある感覚を欠くと、その感覚によって得られる知識を得ることはできないのである<sup>11</sup>。

<sup>9</sup> QDA, q. 15, cor. ( Leonina, u. 274-293 ) , および Avicenna, *Liber de anima seu sextus de naturalibus*, V, 5 (S. Van Riet ed., Louvain: E. Peeters, 1972), p. 127, u. 48-50 を参照。

<sup>10</sup> QDA, q. 15, cor. ( Leonina, u. 240-247, 293-304 ) を参照。

<sup>11</sup> QDA, q. 15, cor. ( Leonina, u. 248-267, 305-318 ) を参照。

感覚とは、プラトン主義者たちが言うように魂にただ刺激を与えるだけのものでもなければ、アヴィセンナが言うように魂を態勢づけるだけのものでもない。感覚は人間の魂が知性認識するために、自然本性的に、また自体的に必要なものなのでとトマスは主張する。トマスによれば、人間の魂は、それによって知性認識をおこなうための可知的な形象を、生得的に有してはいない。人間の魂は、初めはあたかも何も書かれていない板のように、可知的形象に対して可能態にある。そして、魂はこの可知的形象を、感覚を通して可感的物から獲得しなければならないのである<sup>12</sup>。更にトマスは、人間の魂は知識を獲得することにおいてだけでなく、すでに得た知識を用いることにおいても表象像を必要とするとしている。トマスによれば、そのことは、表象像が収容保存されている身体器官が損傷を受けると、すでに知っている事柄についてさえも、その考察に支障をきたすことから明らかである。このように人間は、表象像に向かうことなしには、すでに知識を持っている事柄について考察することさえできないのである<sup>13</sup>。

しかしトマスがとるこの立場は、身体から分離した魂がどのようにして知性認識することができるのかを知ること、いっそう難しくするものである<sup>14</sup>。表象像がなければ知識を得ることも、すでに得た知識を用いることもできないならば、身体の滅びによって表象像が失われると、魂はもう知性認識することができなくなってしまうのではないか。だがしかし、もし知性認識をすることができなくなったら、分離した魂は自らに固有のはたらきを持たないことになり、人間の魂の不可滅性の根拠は失われてしまうのである。

---

<sup>12</sup> このことは *QDA*, q. 8 においても述べられている (*QDA*, q. 8, cor. u. 186-197: “. . . non habet anima humana intelligibiles species sibi naturaliter inditas quibus in operationem propriam exire possit . . . set est in potentia ad eas, cum sit sicut tabula in qua nichil est scriptum, ut dicitur in III De anima. Vnde oportet quod especies intelligibiles a rebus exterioribus accipiat mediantibus potentiis sensitivis, que sine corporeis organis operationes proprias habere non possunt.”)。

<sup>13</sup> *QDA*, q. 15, cor. ( Leonina, u. 319-325 ) を参照。また下の註 128 を参照。

<sup>14</sup> *QDA*, q. 15, cor. ( Leonina, u. 360-361 ) を参照。

トマスはこの解決のために、人間の魂が知性認識のために感覚を必要とするのは、魂の持つ知性の能力の弱さにその原因があることを指摘し、知性的諸実体の階層的秩序の観点から、それを説明している。トマスによれば、人間の魂は知性的諸実体の秩序において最下位にあり、最低最弱の仕方では知性的な光もしくは知性的な本性を有しているに過ぎない。第一の知性認識者である神は、ただひとつの形相、すなわち神ご自身の一なる本質によって、全てを知性認識することができる。神以外の知性的実体は、神ほどの強大な知性的本性を持たないため、多数の形相によって知性認識する必要があるが、それぞれの有する知性的能力に応じて、必要とされる形相の数が異なる。上位の知性的実体であればあるほど知性の能力は高く、従って、より少ない、より普遍的で、事物の把握のための有効性のより大きい形相によって、知性認識することができる。それゆえ、もし下位の知性的実体が、上位の知性的実体が有するのと同じ程度に普遍的な形相によって知性認識するとしたら、知性の能力の不十分さのために、得られる知識は不完全なものでしかないであろう<sup>15</sup>。

さて、人間の魂は知性的諸実体の内で最下位にあり、その知性的能力は最弱である。それゆえ、もし人間の魂が離在的諸実体に適合する程の抽象的で普遍的な形相によって知性認識しなければならないとしたら、魂は、ただ概観的で混同した仕方では物事を知るだけの、極めて不完全な認識しか持つことができないであろう<sup>16</sup>。従って、魂が完全で判然な認識を得るためには、自らの能力に適合した形相によって、すなわち、感覚を通して個々の事物から得た形相によって知性認識する必要があるのである。トマスによれば、まさにそのためにこ

---

<sup>15</sup> *QDA* q. 15, cor. (Leonina, u. 375-384) を参照。Cf. *STI*, q. 85, a. 1, cor.: “. . . superiores autem intellectualium substantiarum, etsi per plures formas intelligent, tamen intelligent per pauciores, et magis universales, et virtuosiores ad comprehensionem rerum, propter efficaciam virtutis intellectivae quae est in eis.”

<sup>16</sup> *QDA* q. 15, cor. (Leonina, u. 384-390) を参照。

そ 魂は身体とひとつになっているのであり、感覚を通して知識を得ることは、魂の認識のために本性的に必要なことなのであり、また有益なことなのである<sup>17</sup>。

とは言うものの、トマスは、現世における身体との合一は、魂にとって万事において有益というわけではないとしている。なぜなら、この身体は、魂が上位の知性的実体から形象を受け取ることを、確かに妨害しているからである。トマスは次のように述べている。

「身体的な運動変化や諸感覚の就労によって、魂が離在的諸実体からの流入を受容することが妨げられるということには、疑いがない。」<sup>18</sup>

それゆえに、神からの啓示は、人が眠っている時や感覚を失っている時に与えられるのであって、人が感覚を用いている時にはそういうことが生じないのである<sup>19</sup>。つまり、身体は、この世において魂が可感的事物を通して知識を得る

<sup>17</sup> *QDA* q. 15, cor. (Leonina, u. 390-397) を参照。Cf. *STI*, q. 85, a. 1, cor.: “Ad hoc ergo quod perfectam et propriam cognitionem de rebus habere possent, sic naturaliter sunt institutae ut corporibus uniantur, et sic ab ipsis rebus sensibilibus propriam de eis cognitionem accipiant . . . . Sic ergo patet quod propter melius animae est ut corpori uniatur, et intelligat per conversionem ad phantasmata.”

<sup>18</sup> *QDA* q. 15, cor. (Leonina, u. 398-400) Cf. *STI*, q. 89, a. 2, ad 1: “. . . sed tamen [anima separata] quodammodo est liberior ad intelligendum, inquantum per gravedinem et occupationem corporis a puritate intelligentiae impeditur.” このことは、この世において魂が合一しているこの身体が、可滅的であるということに、その原因がある。トマスによれば、終末における復活の時、人間には可滅的ではなく不可滅的な身体が与えられる。そして、その身体は魂の活動を決して妨げないのである。次の記述を参照：*SCG* IV, c. 85, Marietti, 4215: “Sic igitur intelligenda est incorruptibilitas futuri status, quia hoc corpus, quod nunc corruptibile est, incorruptibile divina virtute reddetur: ita quod anima in ipsum perfecte dominabitur, quantum ad hoc quod ipsum vivificet; nec talis communicatio vitae a quoquamque alio poterit impediti.” (「それゆえ、将来の状態の不可滅性は次のように理解されるべきである。現在は可滅的であるこの身体は、神の力によって不可滅的なものとされるであろう。こうして魂は、生かすことにおいて完全に身体を支配するようになるであろう。そして、魂がこのように身体に生命を分かつことを妨げるものは何もないであろう」)。

<sup>19</sup> *QDA* q. 15, cor. (Leonina, u. 401-403) を参照。Cf. *SSS*, II, d. 7, q. 2, a. 2, cor.; *QDV*, q. 8, a. 12, ad 3; *STI*, q. 86, a. 4, ad 2. 「啓示」(reuelatio)とは、「人間の眼におおわれて見るこ

ためには必要であり有益なものなのであるが、他面、上位の実体からの流入に関しては障害となっているのである。

魂は、それゆえ、この世の生が終わり身体から完全に分離されると、上位の諸実体からの流入を豊かに受け取ることができるようになるとトマスは言う。そして、こうした流入によって、魂は、もはや表象像なしに知性認識することが可能になるとされている。身体とひとつになっている時と身体から分離した後では、その存在の仕方 (*modus essendi*) の変化に従って、知性認識の仕方 (*modus intelligendi*) も変わるのである。つまり、分離した魂は天使たちと同じ知性認識の仕方でき知性認識できるようになる<sup>20</sup>。このようにしてトマスは、魂が身体からの分離後に、それまでは不可能であった表象像なしに知性認識するということが可能になることを論理づけている<sup>21</sup>。

しかしながら、このような流入によって得られる知識はどのようなものなのであろうか。トマスによれば、それは、この世で感覚を通して得る知識のように完全なものでもなければ、諸々の個物について明確なものでもない<sup>22</sup>。身体からの分離によって、魂の存在様態は変わるが、その自然本性自体は不変なのであり、自然本性的に有している知性的能力も不変である。身体から分離後も、

とのできない神の奥義が、神の愛によって神の側からそのおおいを外されて人間の前に開示されること」を言う(山田晶 編訳『世界の名著 トマス・アクィナス』中央公論社、1980年、p. 83、註10)。

<sup>20</sup> Cf. *STI*, q. 89, a. 3, cor.: “. . . anima separata intelligit per species quas recipit ex influentia divini luminis, sicut et angeli.” (分離された魂が知性認識するのは、神の光に基づいてその受けとる形象によるものなること、天使の場合と同様である) 大鹿 訳)。

<sup>21</sup> *QDA* q. 15, cor. (Leonina, u. 403-407) を参照。トマスは *STI*, q. 89, a. 1 において、はたらきの様態 (*modus operandi*) は存在の様態 (*modus essendi*) に従うのであり、魂は分離する前と分離後ではそれぞれ違った存在様態を有するのだから、それぞれ違った知性認識様態 (*modus intelligendi*) で知性認識すると述べている (Cf. *STI*, q. 89, a. 1, cor)。また、*STI*-II, q. 5, a. 1 では、これら二つの認識様態は、どちらも人間の魂にとって自然本性的にかなった様態であるとも述べている (Cf. *STI*-II, q. 5, a. 1, ad 2: “. . . homini secundum statum praesentis vitae, est connaturalis modus cognoscendi veritatem intelligibilem per phantasmata. Sed post huius vitae statum, habet *aliud modum connaturalem* ut in Primo dictum est.”)。イタリックは筆者。

<sup>22</sup> *QDA* q. 15, cor. (Leonina, u. 407-410) を参照。



その能力はやはり最低最弱のままなのであって、そのような流入によって得られる形象によっては、魂は完全で明確な知識を得ることができないのである。これにより、分離した魂が上位の離在的知性実体すなわち天使たちと同様の認識様態で知性認識するようになるということと、魂の自然本性に適合する認識様態は感覚を通して形象を得ることであるということの、論理的な整合性が保たれている。

トマスはまた、この世において感覚を通して得た可知的形象は知性の内に保存されるのであり、分離した後も、魂はそれらの形象によって知性認識することが可能であるとしている<sup>23</sup>。トマスによれば、そういう仕方でも獲得された知識こそが、人間の魂にとって完全で、かつ個々の事物についての明確な知識なのである。

さて、以上『定期討論集 デ・アニマ』第十五問題におけるトマスの解答を概観した。このテキストにおけるトマスの論述の特徴として挙げられるであろうことは、トマスが、身体から分離した後に魂が新たに持つであろう認識について、それが不完全で混乱したものに過ぎないことを強調しているということである。そしてそれに伴い、この世における魂と身体の一の必然性と、感覚を通して知性認識することの自然本性的な適合性が明確化されている。この特徴は、このテキストと非常に近い時期に書かれたとされている平行箇所、『神学大全』第一部、第八十九問題における記述にも見られる。トマスはこの二つのテキストとほぼ同じ時期にアリストテレスの『デ・アニマ』の註解を書いていたとされているので<sup>24</sup>、アリストテレス主義的な人間本性のとらえ方に、意識が集中していたのかも知れない<sup>25</sup>。

<sup>23</sup> *QDA* q. 15, cor. (Leonina, u. 414-417) および ad 15 を参照。Cf. *STI*, q. 89, a. 5, cor.

<sup>24</sup> Torrell, *Saint Thomas Aquinas*, pp. 171-174, p. 341 を参照。

<sup>25</sup> *ST* と *QDA* が共にトマスの後期の著作に属することから、Anton C. Pegis は、これをトマスにおけるアリストテレス的な人間本性のとらえ方の深まりを示すものとし、トマスが自らの学説を後期に修正変更したのだと主張した。Anton C. Pegis, "The Separated Soul and Its Nature in St. Thomas," in Armand Maurer ed., *St. Thomas Aquinas 1274-1974, Commemorative Studies* (Tronto: Pontifical Institute of Mediaeval Studies, 1974), pp.

また、この二つのテキストにおいてトマスは、今論じているのは人間の魂の「自然的な認識」(cognitio naturalis) についてであるということをはっきりと述べており、神の恩寵による超自然的な認識、すなわち至福の報いが与えられ<sup>26</sup>、神を見るに至った聖者たちの魂の、いわゆる「栄光の認識」(cognitio gloriae) とは区別するよう注意を促している。『定期討論集 デ・アニマ』第十五問題において、トマスは次のように言っている。

「ただし、今述べられているこの自然的な流入を超えて、それとは別に、全てのことをこの上なく豊かに知るために、また神ご自身を見るために、恩寵の超自然的な流入を受けるであろう人々の魂については別である。」<sup>27</sup>

同じく『神学大全』第八十九問題において、トマスは次のように言っている。

「これは分離された魂の自然的な認識について語るかぎりにおいてであり、栄光の認識の場合はまた別である。」<sup>28</sup>

---

131-158 を参照。しかし、人間の魂の認識能力が知性的実体のうちで最下位であるということ、人間はその自然的な知性能力に適合した認識をするために感覚を必要とするということ、人間の魂と天使は種的に異なるということ、そして身体との合一は自然本性的なものであるということなどは、トマスがどの著作においても終始一貫して主張していることなのであり、トマスが学説を変更したとする必要はないように思われる(下の註 148 を参照)。ペギスの解釈に対する反論として、拙書 Jun Inoue, *On the Development of St. Thomas Aquinas's Theory of the Knowledge of the Separated Human Soul*, Ph.D diss., (Washington, DC: The Catholic University of America, 2000; UMI Microform, 9969541) を参照。また John Wippel, "Thomas Aquinas on the separated soul's natural knowledge," in James McEvoy and Michael Dunne ed., *Thomas Aquinas: Approaches to Truth* (Dublin: Four Courts Press, 2002), pp. 114-140 をも参照されたい。

<sup>26</sup> 至福の報い (praemia beatitudinum) については、STI-II, q. 69, q. 4, cor. を参照。

<sup>27</sup> QDA q. 15, cor. (Leonina, u. 410-414)

<sup>28</sup> ST I, q. 89, a. 2, cor.: ". . . loquendo de cognitione naturali animae separatae. De cognitione autem gloriae est alia ratio."

トマスによれば、人間の魂は栄光の認識においては、天使と同じあるいはそれ以上の知識を持つことになる。しかし、トマスはそのような超自然的な認識を、論脈から意識的に外しているのである。ここでは、超自然的な栄光の認識についてではなく、人間の魂が自然本性的に有している知性の能力によってなし得る自然的な認識を吟味することに的が絞られている。つまり、特別な人々の魂の認識についてではなく、すべての人間の魂に当てはまるような分離後の知性認識について、トマスはここでは論じているのである。これによって、人間である限りにおける全ての魂が身体から分離して存続するということが確証されることになる。

しかし、自然的な認識に限って語るならば、魂の知性的能力が天使たちに劣ることは、知性実体の階層的秩序から明らかである。『定期討論集 デ・アニマ』第二十問題において、トマスは次のように述べている。

「栄光の認識について言えば、魂は天使と同じか、あるいはそれ以上でさえもあり得るのであるが、我々は今その認識について語っているのではない。我々が今語っているのは自然的な認識についてであり、この認識においては、魂は天使に劣るのである。」<sup>29</sup>

人間の魂は天使たちと異なり、生得的な形象も有しておらず、感覚の助けがなければ完全で判然な認識を得ることができない。身体からの分離後に上位の実体からの流入によって可知的形象を受け取ることはできても、それを十分に用いるための能力が不足している。従って、自然的な認識に関する限り、身体から分離した魂は、不完全で混乱した認識しか得ることができないのである。

---

<sup>29</sup> *QDA*, q. 20, ad 11 (Leonina, u. 401-405): “. . . non enim loquimur nunc de cognitione glorie, sed undum quam anima potest esse angelis uel equalis, uel etiam superior; set loquimur de cognitione naturali, in qua anima deficit ab angelo.” Cf. *QDA*, q. 17, ad 2; *STI*, q. 89, a. 8, cor.

しかし、トマスは、このように語ることによって、人間の自然的な知性認識能力の低さを嘆いているのであろうか。必ずしもそうではないと思われる。トマスの主張の根本には、キリスト教信仰に基づく肯定的な人間観があることを見逃すべきではないであろう。トマスは、身体と魂からなる人間本性というものを、非常に前向きにとらえようとしているのではないだろうか。

人間がこのような身体を持っていること、このような魂を有していることは、現世において我々に与えられている現実である。この現実はしかし、偶然たまたまそうなったものであるとはされていない。これは神の創造のわざによるものなのである。すべての有 (ens) は必ず神によって原因されたものであり<sup>30</sup>、そして、神が存在を与えているすべてのものは、有であるがぎりにおいて善なるものである<sup>31</sup>。有というものを全面的に肯定する立場にトマスは立つ。従って、人間が身体を有するということ、そして人間の魂が知性認識のために感覚や表象像を必要としていること、これらのことが無意味であるはずはなく、必ず何らかの積極的な理由があるはずなのである。

人間は知性と意志を具えた理性的被造物として創造されたとされる。トマスによれば、その意味で人間は神の似像 (imago Dei) に造られたのであり、知性のはたらきを有し、自由意志を有する者として、人生の究極目的へと向かって自らの道を自らの責任において歩んで行く<sup>32</sup>。この歩みのために、身体は魂にとって必要な助けとなるのである。身体との合一は魂の益のため (melius animae) であり<sup>33</sup>、この世において身体器官を用いて努力して獲得される認識は、魂に固有の意味での完全な認識である。我々がこの世で学んで行く努力は決して無駄にはならないであろう<sup>34</sup>。

---

<sup>30</sup> STI, q. 44, a. 1, cor. を参照。

<sup>31</sup> STI, q. 5, a. 3, cor. を参照。

<sup>32</sup> STI-II, q. 1, prologus を参照。

<sup>33</sup> STI, q. 89, a. 1, cor. を参照。

<sup>34</sup> STI, q. 89, a. 3, ad 4 を参照。

しかしながら、だからと言って、この世において質料的事物を通して得られる知識に人間の究極目的があるとされてはいない。トマスは次のように言っている。

「人間の究極的な完成であるところの人間の究極的至福が、可感的事物の認識において成立することはあり得ない。」<sup>35</sup>

トマスによれば、神を見ることに存する究極の完全なる至福(ultima et perfecta beatitudo)こそが、人間の究極目的である。完全なる至福とは、知性認識のはたらきにおいて成立する知性的本性の有する完全なる善であるとされており<sup>36</sup>、この世の生において得られる至福は「不完全な至福」に過ぎない<sup>37</sup>。人間はこの不完全な至福を越えて、究極の完全なる至福に至ることが可能なものであるとされているのである。しかし、その到達が可能となるのは、この世におけるこの可滅的な身体から分離した後である<sup>38</sup>。知性の完全なはたらきのためには、魂を鈍重にする、この可滅的な身体からは引き離される必要がある<sup>39</sup>。また、単に知識が増えればよいのではない。人間の究極目的である完全な至福に至るためには、神の愛へと向かう正しい意志が必要であるともトマスは言っている<sup>40</sup>。

---

<sup>35</sup> ST I-II, q. 3, a. 6, cor.: “In cognitione autem sensibilibus non potest consistere ultima hominis beatitudo, quae est ultima eius perfectio.”

<sup>36</sup> ST I, q. 26, a. 2, cor. を参照。

<sup>37</sup> ST I-II, q. 5, a. 3, cor. を参照。

<sup>38</sup> トマスは、人間の魂は身体から分離すると直ちに至福の報い(あるいは罰)を受けるとしている(SSS IV, d. 45, q. 1, a. 2, qa. 2; SCG IV, c. 91 を参照)。しかし最終的に究極の至福が成立するのは、トマスによれば、この世の終末において、分離した魂が不可滅的な身体と合一され、自然本性的な完全性にいたらしめられる時である(SCG IV, c. 82; ST I-II, q. 4, a. 6, cor. を参照)。この点については、拙稿「復活における、至福の増大についての一考察」『南山神学別冊』第17号(2000年) pp. 103-127、「トマス・アキナスにおける分離した魂の認識の問題 魂の二つの認識様態をめぐるトマスの見解の一貫性について」『日本カトリック神学会誌』第12号(2001年) pp. 89-103 を参照されたい。

<sup>39</sup> ST I-II, q. 4, a. 6, ad 3 を参照。

<sup>40</sup> ST I-II, q. 4, a. 4, cor. を参照。

人間は天使たちと同様、究極の至福にあずかり得るものであるが、天使たちとは異なる仕方で、すなわち時間をかけて少しずつ、究極目的へ向かって歩いていくべきものとして、この世に生を受けているのである。

「人間は、その自然本性上、天使とは違って、即座に究極的な完成に到達するものとして生まれついているのではない。人間には、至福に値するに至るための、天使よりも長い道のりが与えられている。」<sup>41</sup>

このように、分離した魂の認識の問題についての考察は、トマスにおいては、単に分離した魂の知性認識の可能性とそれに伴う魂の不可滅性の確証だけに留まるものではなく、魂と身体をもってこの世に生を受けた人間についてのキリスト教人間観に基づいた肯定的な存在理解、そして、この世の生と後の世の生の両方を含めた包括的な視点からの、究極目的へと向かって歩むべき人間の道の探求を、その根幹とするものであると言えるであろう。

---

<sup>41</sup> *ST I*, q. 62, a. 5, ad 1: “homo secundum suam naturam non statim natus est ultimam perfectionem adipisci, sicut angelus. Et ideo homini longior via data est ad merendum beatitudinem, quam angelo.”

## 11. 翻訳と註

トマス・アキナス 『定期討論集 デ・アニマ』第十五問題<sup>42</sup>

第十五問題では、身体から分離した魂が知性認識することができるかどうかについて討究される<sup>43</sup>。そして〔その答は〕否であるようにも思われる。

---

<sup>42</sup> 本訳は Leonina 版、すなわち B. C. Bazan ed., *Sancti Thomae de Aquino Opera Omnia iussu Leonis XIII P.M. edita, Tomus XXIV-1, Quaestiones Disputatae de Anima* (Roma: Commissio Leonina, 1996) を底本としたが、次の二つの版（以後 Robb 版および Marietti 版と略記する）もたえず参照し、Leonina 版と異なる場合にはそれを註記した。ただしスベリングの違いなどの、さほど重要ではないと思われる小さな異同については一々註記しなかった。James H. Robb, ed., *St. Thomas Aquinas Quaestiones de Anima* (Toronto: Pontifical Institute of Mediaeval Studies, 1968); M. Calcaterra and T.S. Centi ed., *Quaestio Disputata de Anima in Quaestiones Disputatae*, vol. 2, 10<sup>th</sup> edition (Turin: Marietti, 1965)。また、翻訳にあたっては、以下の現代語訳を参照した（以後 Rowan 訳、Robb 訳、および Vernier 訳と略記する）。John P. Rowan, *The Soul: A Translation of St. Thomas Aquinas' De Anima* (St. Louis: Herder Book Co., 1951); St. Thomas Aquinas, *Questions on the Soul*, trans. James H. Robb (Milwaukee: Marquette University Press, 1984); Saint Thomas d'Aquin, *Questions disputées de l'âme*, introduction, traduction et notes par Jean-Marie Vernier (Paris: L'Harmattan, 2001)。Rowan 訳は Marietti 版による翻訳、Robb 訳は本人の校訂版による翻訳、Vernier 訳は Leonina 版による翻訳である。

<sup>43</sup> QDA, q. 15 の平行箇所は次の通りである。ST I, q. 89, a. 1; I-II, q. 67, a. 2; *Scriptum super libros Sententiarum* (以降 SSS と略記する) III, d. 31, q. 2, a. 4; SSS IV, d. 50, q. 1, a. 1; *Quaestiones disputatae de ueritate* (以降 QDV と略記する) q. 19, a. 1; *Summa contra Gentiles* (以降 SCG と略記する) II, c. 80-81; *Quaestiones de quodlibet* (以降 QL と略記する) III, q. 9, a. 1。このうち、出版されている邦訳は、QDV, q. 19, a. 1: 山本耕平 訳「死後の魂の認識について（真理論 第 19 問題）」、『聖カタリナ女子大学研究紀要』第 15 号（2003 年）pp. 147-57、および ST I, q. 89, a. 1: 大鹿一正 訳『トマス・アキナス 神学大全』第 6 冊（創文社、1969 年）pp. 374-381 である。なお、これらのテキストにおけるトマスの分離した魂の知性認識についての見解を分析したものとして、拙書 Inoue, *On the Development of St. Thomas Aquinas's Theory of the Knowledge of the Separated Human Soul*, および Wippel, "Thomas Aquinas on the separated soul's natural knowledge" を参照されたい。

## 【異論】

(a)<sup>44</sup> なぜなら、分離した魂には、結合体 (coniunctum)〔に固有〕のはたらき (operatio) は何も残らないからである<sup>45</sup>。しかるに、知性認識することは結合体のはたらきである。と言うのも、アリストテレス (Philosophus) が『デ・アニマ』第一巻に述べているように、「魂が知性認識する」と言うことは、「魂が機を織る」あるいは「魂が家を建てる」と言うのと同じ様なことだからである<sup>46</sup>。それゆえ、知性認識のはたらきは、身体から分離した魂の内には残らないのである。

<sup>44</sup> この異論は、Marietti 版では異論 1 となっている。Robb 版にはない。Leonina 版, Robb 版, Marietti 版における異論の関係を下の表に示す。

Leonina	a	1	b	c	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
Robb	/	/	/	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
Marietti	1	2	3	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
Leonina	15	16	17	18	19												
Robb	15	16	17	18	19												
Marietti	17	18	19	20	21												

Leonina 版において異論 1 および異論 a, 異論 b, 異論 c とされているテキストは, Robb 版では異論 c だけが異論 1 として採用され, Leonina 版における異論 1 と異論 a 異論 b は Robb 版では採用されていない (Robb 版 p. 206 註 1 を参照)。Marietti 版では Leonina 版における異論 a が異論 1 として載せられており, Leonina 版の異論 1 が異論 2 として, そして Leonina 版の異論 b と異論 c が分けられずに異論 3 として載せられている。つまり, Leonina 版の異論 1 と Robb 版の異論 1 は内容が異なっている。また Marietti 版は Leonina 版および Robb 版と異論の数が異なっており (Leonina 版と Robb 版の異論の数が 19 であるのに対し Marietti 版は 21), 異論と異論解答の番号は全部ずれてしまっている。Leonina 版におけるこの箇所のテキストの選択に関しては, B. C. Bazan ed., *Quaestiones Disputatae de Anima*, Préface, p. 73\*, p. 96\*-99\* を参照。

<sup>45</sup> ここで言われている結合体 (coniunctum) とは, 身体と魂から成る結合体としての人間, すなわち魂が身体から分離する前の現世における状態の人間を意味している。Cf. Roy Deferrari ed., *A Lexicon of St. Thomas Aquinas* (Washington, DC: Catholic University of America Press, 1948), s. v. "coniunctum".

<sup>46</sup> Aristoteles, *De anima* I, 408b11-13 を参照。本稿では, Philosophus (哲学者) という語が アリストテレスを指して用いられている場合には, Philosophus を「アリストテレス」と訳すことにする。



(1)<sup>47</sup> 更に、アリストテレスは『デ・アニマ』第三巻において、知性認識は表象像 ( *fantasmata* ) なしには決してないと言っている<sup>48</sup>。しかるに、表象像は感覚器官の内にあるのだから、分離した魂のうちにはあり得ない。それゆえ、分離した魂は知性認識しない。

(b)<sup>49</sup> これに対し、アリストテレスがそう言っているのは身体とひとつになっている限りにおける魂についてであって、分離した魂についてではない、という反論があった。——しかし他方、分離した魂が知性的能力 ( *potentia intellectiva* ) によらずに知性認識することは不可能である…。

(c)<sup>50</sup> 更に<sup>51</sup>、アリストテレスが『デ・アニマ』第一巻において言っているように<sup>52</sup>、知性認識すること、は表象のはたらき ( *fantasia* ) であるか、あるいは表象のはたらきなしには存在しないものであるかのどちらかである<sup>53</sup>。しかるに、身体なしに表象のはたらきは存在しない。それゆえ、知性認識することもまた存在しない。従って、分離した魂は知性認識しないのである。

<sup>47</sup> この異論は、Marietti 版では異論 2 となっている。Robb 版にはない。

<sup>48</sup> Aristoteles, *De anima* III, 431a16-17 を参照。

<sup>49</sup> この異論は、Marietti 版では異論 3 (前半) となっている。Robb 版にはない。

<sup>50</sup> この異論は、Marietti 版では異論 3 (後半) となっている。Robb 版では異論 1 となっている。

<sup>51</sup> Leonina 版ではこのパラグラフは *Praeterea* という語で始められているが、その前の (b) の最後が “*intellectivam...*” というように未完結の形で記され、この (c) への連続性が示唆されている。Robb 版ではこの (c) が異論 1 となっており、導入部分の “*Et videtur quod non.*” に続いて、*Quia* という語で始められている。Marietti 版では (b) と (c) がひとつのパラグラフにまとめられており、(c) は *Sed* という語で始められている。

<sup>52</sup> Aristoteles, *De anima* I, 403a8-9 を参照。異論 c と異論 3 において挙げられているこのアリストテレスの言葉は、魂の不可滅性について論じている *SSSII*, d. 19, q. 1, a. 1, arg. 6 においても引用されている。

<sup>53</sup> 本稿では、*fantasia* を「表象のはたらき」、*fantasma/fantasmata* を「表象像」と訳すことにする。アリストテレスにおけるこの二つの語の用法については、中畑正志訳『アリストテレス・魂について』西洋古典叢書 (京都大学学術出版会, 2001 年) 11 頁の註 7 と 141 頁の註 4 を参照。

(2)<sup>54</sup> 更に、アリストテレスは『デ・アニマ』第三巻において、知性と表象像との関係は、視覚と色彩の関係と同様であると言っている<sup>55</sup>。しかるに、視覚が色彩なしに見ることは不可能である。それゆえ、知性が表象像なしに知性認識することも不可能なのであり、従って、身体なしに知性認識することもまた不可能である。

(3)<sup>56</sup> 更に、アリストテレスは『デ・アニマ』第一巻において、知性認識のはたらきは、たとえば心臓とか自然的な熱<sup>57</sup>とかいった何かが〔身体の〕内部で滅することによって消え失せると言っている<sup>58</sup>。こういったものは確かに、魂が身体から分離する時に滅びる。従って、身体から分離した魂は知性認識することができないのである。<sup>59</sup>

<sup>54</sup> この異論は、Marietti 版では異論 4 となっている。

<sup>55</sup> Aristoteles, *De anima* III, 425b17-20; III, 431a14-15 を参照。また、Thomas Aquinas, *Sentencia Libri De anima* (以降は *In De anima* と略記) I, c. 2 (Leonina, pp. 9-10, u. 46-69) を参照。トマスはアリストテレスのこの見解をすでに *SSSI*, d. 3, q. 1, a. 1, arg. 5 においても挙げている。

<sup>56</sup> この異論は、Marietti 版では異論 5 となっている。

<sup>57</sup> 自然的な熱 (calor naturalis) とは、トマスによれば、生命の営みにおいて魂の道具 (instrumentum animae) としてはたらく熱のことである。*STI*, q. 97, a. 4, cor. および q. 115, a. 1, ad 5 を参照。

<sup>58</sup> Aristoteles, *De anima* I, 408b24-25 を参照。

<sup>59</sup> Leonina 版と Marietti 版はほぼ同じであるが、Robb 版は最後の部分が異なっている。Leonina: “quod quidem corrumpitur, anima a corpore separata. Igitur anima a corpore separata intelligere non potest.” Robb: “quod quidem corrumpitur, anima a corpore separata intelligere non potest.” (イタリックは筆者)。このテキストの違いを反映して、Robb はこの箇所を次のように訳している。Robb: “But if the act of understanding does in fact cease, a soul separated from its body is not able to understand.” すなわち Robb は “quod quidem corrumpitur” を、「知性認識のはたらきが消え去る」という意味にとっている。Leonina 版と Marietti 版のテキストにおいては、“quod quidem corrumpitur” の後に “anima a corpore separata” という言葉が置かれており、“quod quidem corrumpitur” は、知性認識のはたらきが滅びることではなく、身体内部にあるものが滅びることを意味していると解し得る。同様の異論は次の箇所にも挙げられており、*SSSIV*, d. 50, q. 1, a. 1, arg. 1; *QDV*, q. 19, a. 1, arg. 7; *STI*, q. 89, a. 1, arg. 1, そこでも、身体内部にあるものは死によって (per mortem) あるいは、死において (in morte) 滅びると述べられている。

(4)<sup>60</sup> これに対し、次のような反論があった。身体から分離した魂はもちろん知性認識する。ただし、表象像からの抽象によって知性認識するというこの世における仕方で認識するのではない。——しかし他方、形相が質料とひとつになるのは、質料のためにではなく、形相のためにである。なぜなら形相は質料の目的（*finis*）であり完成態（*perfectio*）なのだから。一方形相は、自らのほたらきの成就のために質料とひとつになっている。それゆえ形相は、それによって形相のはたらきが成し遂げられ得るような性質の質料を必要とする。たとえば、のこぎりの形相が、切るはたらきを成し遂げるために鉄という質料を必要とするように。しかるに魂は身体の形相である。それゆえ魂は自らのほたらきの成就のために、このような性質の身体とひとつになっているのである。魂の固有のはたらきとは知性認識することである。それゆえ、もし魂が身体なしに知性認識することができるのなら、無意味に身体とひとつになっていることになろう。<sup>61</sup>

(5)<sup>62</sup> 更に、もし分離した魂が知性認識することができるなら、身体とひとつになっている時よりも分離している時の方が<sup>63</sup>、より優れた仕方で（*nobilius*）知性認識することになる。なぜなら、知性認識するために表象像を必要としない諸実体、すなわち離在的諸実体は<sup>64</sup>、表象像によって知性認識する我々よりも、

<sup>60</sup> この異論は、Marietti 版では異論 6 となっている。

<sup>61</sup> Leonina 版と Robb 版では “*frustra corpori uniretur*”（接続法・未完了）となっているが、Marietti 版では “*frustra corpori unitur*”（直説法・現在）となっている（イタリックは筆者）。

<sup>62</sup> この異論は、Marietti 版では異論 7 となっている。

<sup>63</sup> Marietti 版と Robb 版は “*nobilius intelligit sine corpore*” Leonina 版は “*nobilius intelligit separata*”（イタリックは筆者）。

<sup>64</sup> 離在的実体（*substantia separata*）とは天使（*angelus*）と呼ばれる純粋に霊的な被造物のことである。離在的実体と言われるのは、それが非質料的・非物体的であり、質料なしに形相だけで独立して存在する実体だからである。ST I, q. 50, a. 1-2 および *De substantiis separatis*, cap. 7-8, 19 を参照。

より優れた仕方を知性認識するのだからである<sup>65</sup>。しかるに、知性認識することの内に魂の善はある。と言うのも、いかなる実体においても、その固有のはたらきが、その実体の完成態だからである。それゆえ、もし魂が身体なしに、表象像によらずに (*preter fantasmata*) 知性認識することができるならば、身体とひとつになることは魂にとって有害なことになるであろうし、従って、それは魂にとって自然本性的ではないことになるであろう。

(6)<sup>66</sup> 更に、能力はその対象に従って分化される。しかるに、アリストテレスが『*デ・アニマ*』第三巻において言っているように、知性的魂の対象は表象像である<sup>67</sup>。それゆえ、もし身体から分離した魂が表象像なしに知性認識するのだとしたら、〔身体とひとつになっている時とは〕別の能力を魂は有するのなければならぬ。しかしながら、それは不可能である。魂の能力は自然本性的なものであり、魂から切り離すことのできない生得的なものなのだから。

(7)<sup>68</sup> 更に、もし分離した魂が知性認識するのだとしたら、それは何らかの能力によるはずである。しかるに、魂における知性的能力は、能動知性 (*intellectus agens*) と可能知性 (*intellectus possibilis*) の二つにおいて他にはない。しかしながら、分離した魂はこのいずれの能力によっても知性認識することはできないと思われる。なぜなら、どちらの知性のはたらきも表象像に関わるからである。と言うのも、能動知性は表象像を現実態として可知的なものにするのであるし、可能知性は表象像から抽象された可知的形象を受け取るのだからである。

---

<sup>65</sup> 分離した魂が天使たちと同じ認識様態によって知性認識するであろうことは、*QDV*, q. 19, a. 1, cor. (Leonina, u. 381-88) および *SCG* II, cap. 81 (Marietti, p. 236, n. 1625, g) にも述べられている。

<sup>66</sup> この異論は、Marietti 版では異論 8 となっている。

<sup>67</sup> Aristoteles, *De anima* III, 431a14-15 を参照。

<sup>68</sup> この異論は、Marietti 版では異論 9 となっている。

それゆえ、いかなる仕方によっても、分離した魂は知性認識することができないと思われる。

(8)<sup>69</sup> 更に、固有のはたらきというものは、ひとつのものにただひとつであり<sup>70</sup>、完全性というものも、完全になり得るひとつのものにただひとつである。それゆえ、もし表象像から〔可知的形象を〕受け取ることによって知性認識することが魂の〔固有の〕はたらきであるならば、表象像によらずに知性認識することは、魂の〔固有の〕はたらきではあり得ないと思われる<sup>71</sup>。従って、身体から分離した魂は知性認識しないのである。

(9)<sup>72</sup> 更に、知性認識は知性認識者の内にある知性認識された事物の似姿を通してなされるのであるから、もし分離した魂が知性認識するのであれば、それは何らかのものによって知性認識するのではなければならない<sup>73</sup>。しかしながら、分離した魂は自らの本質によって知性認識するのだと言うことはできない。なぜなら、それは神の場合のみである。神の本質は無限であるから<sup>74</sup>、自らの内

<sup>69</sup> この異論は、Marietti 版では異論 10 となっている。

<sup>70</sup> Marietti 版と Robb 版は “unius rei una est propria operatio, *sicut* et unius perfectibilis” となっており（イタリックは筆者）、et の前に *sicut* という語を置いているが、Leonina 版は *sicut* を欠いている。

<sup>71</sup> Marietti 版は、*intelligere* の前に *scilicet* を置いている: “non possit esse eius operatio, *scilicet* intelligere, praeter phantasmata”（イタリックは筆者）。Leonina 版と Robb 版には *scilicet* はない。

<sup>72</sup> この異論は、Marietti 版では異論 11 となっている。

<sup>73</sup> この異論と同様の理論が *QDV*, q. 19, a. 1, arg. 10 においても挙げられているが、そこでは、知性認識されるものは全て、(a) 知性認識するものの本質によって知性認識されるか、(b) 知性認識された事物の本質によって知性認識されるか、(c) 知性認識するもの内に存在する知性認識された事物の似姿によって知性認識されるかのいずれかであるとされ、その全てが不可能であることが主張されている。またトマスは同様の異論を *ST1*, q. 89, a. 1, arg. 3 においても取り上げている。

<sup>74</sup> Leonina 版と Robb 版では “*huius/hujus* enim essentia, quia infinita est” となっているが、Marietti 版では *huius* ではなく *unius* となっている（イタリックは筆者）。異読の写本の註記はなく、Marietti 版より古い Vivès 版、*Thomae Aquinatis Opera Omnia*, vol. 14, *Quaestiones disputatae de anima* (Paris: Vivès, 1875) でも *huius* となっているため、おそら

にあらゆる完全性を先に有しており、それゆえにその本質はあらゆる事物の似姿なのだからである。また同様に、魂は知性認識された事物の本質によって知性認識するのだと言うこともできない。なぜなら、もしそうなら、魂が知性認識するのは自らの本質によって魂の内にあるところのものだけであることになるからである<sup>75</sup>。更にまた、魂が何らかの諸形象によって知性認識すると言うこともできないように思われる。——なぜなら<sup>76</sup>、生得の、あるいは共に創造された（concreata）諸形象によって魂が知性認識すると主張すること<sup>77</sup>、これは、あらゆる知識は我々に自然本性的に生まれつき具わっているとしたプラトンの説に逆戻りすることだと思われるからである<sup>78</sup>。

(10)<sup>79</sup> 更に、このような諸形象が魂に生まれつき具わっていることは無益であると思われる。なぜなら、魂は、身体の内にある間は、こういった諸形象によ

くは誤植であると思われる。なお、Marietti 版を底本としている Rowan 訳においても、この箇所は “for His essence, being infinite” と訳されている（イタリックは筆者）。

<sup>75</sup> この点に関して *QDV*, q. 19, a. 1, arg. 10 では次のように記されている: “... sed non potest dici quod anima intelligat res solum per essentiam ipsius rei intellectae quia sic non intelligeret nisi se ipsam et habitus et alia quorum essentiae praesentialiter sunt in ipsa.”（「ところで、魂は事物を知性認識される事物そのものの本質によってのみ認識することはできない。何故なら、そのような仕方では魂は自己自身と自己の能力態、そして自らのうちにあるそのものの本質が現存して存在しているような他のものを認識するだけであるうからである」山本耕平 訳）。

<sup>76</sup> この箇所のテキストは、Marietti 版では “ut videtur, intelligere potest. Non per species innatas sive concreatas” というように 2 つの文章に分かれているが、Robb 版では “ut videtur, intelligere potest; non per species innatas sive concreatas” というように文章がつけられている。Leonina 版においては、Marietti 版と同様に 2 つの文章に分けられ、enim という語が挿入されている: “ut uidetur, intelligere potest. Non enim per species innatas”

<sup>77</sup> トマスは、個々の人間の知性的魂は神によって直接的に無から創造されるとしている。*STI*, q. 90, a. 3, cor.; *SCG* II, c. 87 を参照。

<sup>78</sup> ここに言及されているプラトンの思想の典拠については、R. J. Henle, *Saint Thomas and Platonism: A Study of the Plato and Platonici Texts in the Writings of Saint Thomas* (The Hague: Martinus Nijhoff, 1956), p. 42 [15] を参照（Henle が用いているテキストは Marietti 版であるため、arg. 11 と記されている）。

<sup>79</sup> この異論は、Marietti 版では異論 12 となっている。

って知性認識することができないのであるから。そして<sup>80</sup>、可知的諸形象は、魂がそれらによって知性認識をするということより他には、何の役割もないように思われるのである。

(11)<sup>81</sup> これに対し、次のような反論があった。魂それ自体に関する限りは、生得的な諸形象によって知性認識することは可能である。しかし、身体によって妨げられているために、それらによって知性認識することができないのである。——しかし他方、自らの本性において完全であればあるほど、はたらきにおいてより完全である。しかるに、身体とひとつになっている魂は、身体から分離している時よりも、自らの本性において、より完全である。それはちょうど、どんな部分も全体においてある方が〔個別に部分としてあるよりも〕より完全であると同様である。それゆえ、もし身体から分離した魂が生得的な諸形象によって知性認識することができるのだとしたら、身体とひとつになっている時にはなおのこと、同じ諸形象によって知性認識することができるはずである。

(12)<sup>82</sup> 更に、あるものの自然本性的な特質が、それ自身の自然本性に属する事柄によって完全に妨げられることは決してない。しかるに、魂は身体の形相なのであるから、身体とひとつになることは魂の自然本性に属することである。それゆえ、もしも可知的諸形象が自然本性的に魂に生まれつき具わっているのであれば、身体とひとつになることによって、魂がそれらの諸形象によって知性認識することができないように妨げられるはずはない<sup>83</sup>。ところが我々はちょうどそれと反対のことを体験しているのである。

---

<sup>80</sup> Leonina 版では *enim*。Marietti 版と Robb 版では *autem*。

<sup>81</sup> この異論は、Marietti 版では異論 13 となっている。

<sup>82</sup> この異論は、Marietti 版では異論 14 となっている。

<sup>83</sup> Leonina 版では、*non impediretur per unionem corporis quin per eas intelligere posset* というようにイタリックで示された 2 語（イタリックは筆者によるもの）が共に接続法・未完になっているが、Marietti 版と Robb 版では、*impediretur*（直説法・未来）、*possit*（接続法・現在）となっている。

(13)<sup>84</sup> ——また、分離した魂は以前に身体の内において獲得した諸形象によって知性認識するということも不可能だと思われる。なぜなら、可知的形象を全く獲得しなかった多くの人の魂が、身体から分離した後、存続するだろうからである。それは幼児たちの魂について、とりわけ、お母さんの胎内で亡くなった子どもたちの魂について、明らかである<sup>85</sup>。それゆえ、もし分離した魂が以前に獲得した諸形象によってしか知性認識することができないのだとしたら、分離した魂の全てが知性認識するわけではないことになる。

(14)<sup>86</sup> 更に、もし分離した魂が、以前に獲得した諸形象によってしか知性認識しないのだとしたら<sup>87</sup>、以前身体とひとつになっていた時に知性認識したことしか、分離した魂は知性認識しないことになると思われる。しかしそれは真実ではないように思われる。なぜなら、分離した魂は、罰とか報いについて<sup>88</sup>、今は知らない多くのことを知るからである。それゆえ、分離した魂は、以前に獲得した諸形象によってのみ知性認識するのではない<sup>89</sup>。

(15)<sup>90</sup> 更に、知性が現実態へともたらされるのは、知性の内に現存する可知的諸形象によってである。しかるに、現実態において知性認識を行なうのは、現実態にある知性である。それゆえ、現実態にある知性が知性認識しているものは全て、その可知的諸形象が知性の内に現実態として存在しているところのも

<sup>84</sup> この異論は、Marietti 版では異論 15 となっている。

<sup>85</sup> 幼くして亡くなった子どもたちの魂の認識についての問題は、*QDV*, q. 19, a. 1, arg. 10; *STI*, q. 89, a. 1, arg. 3 においても取り上げられている。

<sup>86</sup> この異論は、Marietti 版では異論 16 となっている。

<sup>87</sup> Leonina 版では *intelligit* (直説法・現在)。Marietti 版と Robb 版では *intelligeret* (接続法・未完了)。

<sup>88</sup> Leonina 版では“*multa et de penis et de premiis*”となっており、*de penis* の前に *et* が挿入されている (イタリックは筆者)。

<sup>89</sup> Leonina 版では *intelligit* (直説法・現在)。Marietti 版と Robb 版では *intelliget* (直説法・未来)。

<sup>90</sup> この異論は、Marietti 版では異論 17 となっている。



のである。従って、知性が現実態において知性認識することを止めた後には、可知的諸形象は保存されないように思われる。かくして、魂が知性認識することを可能にするところの可知的諸形象は、〔身体からの〕分離後は、魂の内に存続しないのである。

(16)<sup>91</sup> 更に、アリストテレスが『ニコマコス倫理学』第二巻に述べていることから明らかなように<sup>92</sup>、獲得された諸能力態 (habitus) は、その諸能力態がそこから獲得されたはたらきと同様のはたらきを生み出す。すなわち、人が建築者になるのは家を建てることによってであり、そのようにして建築者になった人が、家を建てるのできるのである。しかるに、可知的諸形象が知性に獲得されるのは、知性が表象像へと向かうことによってである。それゆえ、知性は、自らを表象像に向けることなしには、それら〔の諸形象〕によって知性認識することは決してできない。従って、身体から分離した魂が既得の諸形象によって知性認識することは不可能だと思われる。

(17)<sup>93</sup> ——また、分離した魂は上位の実体から流入した諸形象によって知性認識し得ると言うこともできない<sup>94</sup>。と言うのも、受容能力を持つものはそれぞれ、それによってものを受容する固有の作動因 (agens) を生まれつき持っているからである。人間の知性は、感覚 (sensus) <sup>95</sup>を通して諸形象を受け取るよう生まれついている。それゆえ、人間の知性は諸形象を上位の諸実体からは受け取らないのである。

---

<sup>91</sup> この異論は、Marietti 版では異論 18 となっている。

<sup>92</sup> Aristoteles, *Ethica Nicomachea*, II, 1103a26-b22 を参照。

<sup>93</sup> この異論は、Marietti 版では異論 19 となっている。

<sup>94</sup> Leonina 版では *dici potest* (直説法・現在)。Marietti 版と Robb 版では *dici posset* (接続法・未完了)。

<sup>95</sup> トマスはこのテキストにおいて *sensus* という語を多くの場合複数形として用いている。しかし本稿では言葉のぎこちなさを避けるため、僅かな例外を除いてこれを「諸感覚」ではなく単に「感覚」と訳し、単複両方の意味をそこに含めることにする。

(18)<sup>96</sup> 更に、下位の諸作動因によって自然本性的に原因される事柄のためには、上位の作動因のはたらきだけでは〔それを生じさせるのに〕不十分である。たとえば、胚種によって自然本性的に産出される動物たちは、ただ太陽のはたらきだけで産出されるに至るのではない。しかるに人間の魂は自然本性的に感覚を通して<sup>97</sup>諸形象を受け取る。それゆえ、魂が可知的諸形象を獲得することのためには、上位の諸実体からの流入だけでは<sup>98</sup>不十分なのである。

(19)<sup>99</sup> 更に、作動因は受動者に相応していなければならず、流入するものは受容者に相応していなければならない。ところが、上位の諸実体の知的洞察 (*intelligentia*) は人間の魂の<sup>100</sup>知性に相応していない。なぜなら、それらはより普遍的な、我々には把握し得ない知識を有しているであろうからである<sup>101</sup>。それゆえ、分離した魂は、上位の諸実体から流込した諸形象によって知性認識することはできないであろう<sup>102</sup>。このように、分離した魂が知性認識することができる道は残されていないのである。

### 【反対異論】

しかし反対に、知性認識は魂に最も固有の<sup>103</sup>はたらきである。それゆえ、もし知性認識のはたらきが身体なしの魂に適合しないとすれば、魂のその他のいかなるはたらきも適合しないであろう。しかしながら、もし身体なしの魂に何

<sup>96</sup> この異論は、Marietti 版では異論 20 となっている。

<sup>97</sup> Leonina 版では *a sensibus*。Marietti 版と Robb 版では *a sensibilibus*。

<sup>98</sup> Leonina 版では *solus* (男性主格単数)。Marietti 版と Robb 版では *solum* (副詞)。

<sup>99</sup> この異論は、Marietti 版では異論 21 となっている。

<sup>100</sup> Leonina 版では *anime humane*。Marietti 版と Robb 版では *humano*。

<sup>101</sup> Leonina 版と Robb 版は *habeant* (三人称複数)。Marietti 版は *habeat* (三人称単数)。

<sup>102</sup> Leonina 版では *poterit* (未来)。Marietti 版と Robb 版では *potest* (現在)。

<sup>103</sup> Leonina 版と Robb 版は *maxime*。Marietti 版は *maxima et propria*。Leonina 版は別の異読として *maxime propria* を註に挙げている (cf. *adnotationes ad uersus 181*)。

らかのはたらきが適合しないならば<sup>104</sup>，分離した魂が存続することは不可能である。しかし，我々は分離した魂は存続するとしている。それゆえ必然的に，分離した魂は知性認識するとしなければならない。

(2) 更に，聖書の記述によれば，生き返らされた人々は，以前に有していた同じ知識を生き返らされた後にも有している。従って，人がこの世において知る諸々の事柄についての知識は，死後に取り去られはしないのである。それゆえ，〔分離した〕魂は，生前に獲得した諸形象によって知性認識することができるのである。

(3) 更に，上位の事物の内には，下位の事物の類似性が見出される。だからこそ数学者たちは<sup>105</sup>，地上で生じる事柄の類似性を天体の内に見出すことによって，未来を予言するのである。しかるに魂は自然本性的に，あらゆる物体的事物の上位にある。それゆえ，あらゆる物体的事物の類似性が魂の内にある。また，それらは可知的な様態においてある。なぜなら魂は知性的実体なのであるから。従って，魂は自らの自然本性によって，あらゆる物体的事物を知性認識することが可能なのであり，このことは分離後も同じであろうと思われる。

---

<sup>104</sup> Leonina 版と Marietti 版は *conueniet/conueniet* (直説法・未来)。Robb 版は *conueniat* (接続法・現在)。

<sup>105</sup> この数学者たち (*mathematici*) とは，天体観測によって占いをする，占星術師のような人々を指していると思われる。Rowan 訳の註 (p. 194, n. 11) および Leonina 版の註 (*adn. ad u. 194-196*) を参照。

## 【解答（主文）】

答えて次のように言わなければならない。この世の状態において現に我々の魂が知性認識のために感覚<sup>106</sup>を必要としているということ、このことがこの問題に困難をもたらしている。それゆえ、感覚の必要性に関する多様な理論に応じて多様な仕方、この問題の真理については見定める必要がある<sup>107</sup>。

ある人々、すなわちプラトン主義者たちは、我々の魂が知性認識するために、感覚は、それによって知識が我々の内に生ぜしめられるというような意味で自体的（per se）に必要なわけではなく、ただ付帯的（per accidens）に必要なのだとした。すなわち、感覚によって我々の魂が何らかの仕方、刺激されて、魂が以前に知っていた事柄、つまり自然本性的に生具しているそれらについての知識を思い出す限りにおいて、感覚は必要であるとしたのである<sup>108</sup>。このことを理解するためには、プラトンが、事物の諸形象（species）は分離して自存し、現実態において可知的であるとしたこと、そしてそれらをイデアと呼び、それらの分有（participatio）によって、また何らかの仕方の流入によって<sup>109</sup>、我々の魂は知ったり理解したりするのだとしたことを知らなければならない<sup>110</sup>。〔プラトンによれば〕魂は身体とひとつになる前にはその知識を自由に用いることができたのだが、身体との合一によって、かくも大きな重荷を負い、いわば幽閉されてしまい、以前に知った事柄、そして生得的に有していたそれらについての知識を忘却してしまったようである。しかし魂は、感覚によって何らかの仕方、刺激されて自分自身に立ち帰り、以前に知性認識した事柄、そして生得

<sup>106</sup> Marietti 版と Robb 版では *sensibilibus* となっているが、Leonina 版では *sensibus* という読みが採られている。Leonina 版はこのテキストでは一貫してこの読みを採っているように思われる。このことに関して、Robb 訳の註（p. 193, n. 7）を参照。

<sup>107</sup> Leonina 版と Robb 版は *estimare/aestimare*。Marietti 版は *existimare*。

<sup>108</sup> 主文において言及されているプラトンおよびプラトン主義者の思想の典拠については、Henle, *Saint Thomas and Platonism*, p. 42 [16] を参照。

<sup>109</sup> 人間の魂におけるイデアの分有やイデアからの流入については、*STI*, q. 84, a. 4, cor. を参照。

<sup>110</sup> プラトンのこの説については Aristoteles, *Metaphysica I*, 6. を参照。

的に有していたそれらについての知識を思い出すのである。我々も時々、何か可感覚的な事柄を調べていて、忘れていたと思われる何かをはっきりと思い出すことがあるが、ちょうどそれに似ている。

知識と感覚<sup>111</sup>についてのプラトンのこの見解は、自然的諸事物の生成 (generatio) に関する彼の見解と合致する。と言うのもプラトンは、それぞれの個体がそれによって種に配置されるところの自然的諸事物の形象は、先に述べたアイデアの分有によって生起するのだとしたからである。つまり下位の諸作動因は、離在的な形象の分有へと質料を態勢づけているに過ぎないのである。

さて、もしこの説を採るならば、実のところ、問題は簡単に片付いてしまうであろう。なぜなら、この説によれば、知性認識のために感覚<sup>112</sup>は、魂に本性的に必要なわけではなく、ただ付帯的に必要なだけなのであるから。そして、この付帯的な必要性は、魂が身体から分離する時に取り除かれるのである。その時、魂は身体の重荷から解放され<sup>113</sup>、もはや刺激の必要はなくなるであろう。そして自らそれ自体として覚醒し、あらゆるものを知性認識する準備のできた状態になるだろう。

しかしながら、この説に従う限り、何のために魂が身体とひとつになっ  
ているのかについて、納得の行く理由を挙げることはできそうにない。なぜなら、〔この説によれば〕身体との合一は魂の益にならないからである。なにしろ、身

<sup>111</sup> Marietti 版と Robb 版では *sensibilibus*。Leonina 版では *sensibus*。

<sup>112</sup> Marietti 版と Robb 版では *sensibilibus*。Leonina 版では *sensibus*。

<sup>113</sup> 可滅的な身体が魂にとっての重荷であることは、『知恵の書』( *Liber Sapientiae* ) 第九章第十五節に記されている: “. . . corpus enim quod corrumpitur adgravat animam et deprimit terrena inhabitatio sensum multa cogitantem.” (「朽ちるべき体は魂の重荷となり、地上の幕屋が、悩む心を圧迫します」)。この聖句の引用は *Biblia Sacra Iuxta Vulgatam Versionem*, 4<sup>th</sup> edition, ed. R. Weber and R. Gryson, Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft, 1994 より。括弧内の邦訳は新共同訳であるが、これは「ギリシア語旧約聖書」(ゲッティンゲン研究所)からの訳である。トマスは『知恵の書』のこの聖句をしばしば引用している。SSSにおける引用については Charles H. Lohr, *St. Thomas Aquina: Scriptum super sententiis: An index of authorities cited* (Avebury Publishing Company Limited, 1980), p. 27 を、STにおける引用については *Indices. Sancti Thomae Aquinatis Opera Omnia iussu edita Leonis XIII P.M., Tomus 16* (Roma: Commissiones Leoninae, 1948), p. 24 を参照。

体とひとつになっていない時の魂は、その固有のはたらきを完全に行うことができるのに、身体とひとつになることによって、その固有のはたらきが妨げられるというのだから。同様にまた、この合一は身体の益のためであるということもできない<sup>114</sup>。なぜなら、魂は身体よりも高貴なものなのであるから、身体の益のために魂が存在するのではなく、むしろ逆に、魂の益のために身体が存在するのだからである。それゆえ、身体を高貴なものにするために魂が自らののはたらきにおいて損害を被るとするのは理不尽に思われる。

また、この考えからは、魂の身体への合一は自然本性的なものではないということが帰結するように思われる。と言うのも、あるものにとって自然本性的である事柄が、そのものの固有のはたらきを妨げるはずはないからである。従って、もし身体との合一が魂の知性認識を妨げるのなら、身体とひとつになることは魂にとって自然本性的なことではなく、かえって自然本性に反すること (contra naturam) であることになる。そしてそれゆえ、魂と身体とで構成されている人間というものは、自然的な存在 (aliquid naturale) ではないということになるであろう。しかしこれは、馬鹿げたことであると思われる。

また同様に、我々における知識は、離在的な諸形象の分有によって生じるのではなく<sup>115</sup>、諸感覚を通して<sup>116</sup>獲得されるということ、このことは経験的に明らかである。と言うのも、あるひとつの感覚が欠落している人たちには、その感覚によって把握されるところの<sup>117</sup>可感的な事柄の知識が欠落しているからである。たとえば、生まれつき盲目の人は、色彩についての知識を得ることができないのである。

<sup>114</sup> Marietti 版と Robb 版は non potest *dari*. Leonina 版は non potest *dici*. (イタリックは筆者)。

<sup>115</sup> Leonina 版と Marietti 版は *prouenit/provenit*. Robb 版は *pervenit*.

<sup>116</sup> Marietti 版と Robb 版は *sensibilibus*. Leonina 版は *sensibus*.

<sup>117</sup> Leonina 版と Marietti 版は *apprehenduntur* と三人称複数形になっており、把握されるものは *sensibilia* となっているが、Robb 版では *apprehenditur* と三人称単数形になっており、把握されるものは *scientia* になっている。

さて、以上述べた〔プラトン主義者たちの〕説のように、感覚は人間の魂の知性認識のために単に付带的 (per accidens) に役立つとするのではなく、自体的 (per se) に役立つとする、別の説もある。と言っても、感覚を通して<sup>118</sup>我々が知識を受け取るというわけではなく、他のところから知識を得るために感覚が魂を態勢づけるという理由からである。それはアヴィセンナの説である<sup>119</sup>。アヴィセンナによれば、「能動知性」(intellectus agens)ないしは「能動的知性実体」(intelligentia agens)と彼が呼んでいるところの離在的な実体が存在し、我々の知性において我々がそれによって知性認識をするところの可知的諸形象は、その実体から流れ出るとした。そして、感覚的部分のはたらき、すなわち表象作用 (ymaginatio) やその他のそういうはたらきによって、我々の知性は、その能動的知性実体へと自らを向けるために、そしてその実体から流れ出て来る可知的諸形象を受け取るために、整えられるのだとしている。この理論は、アヴィセンナが自然的諸事物の生成について述べていることとも一致している。すなわち彼は、あらゆる実体的形相は全てその知性実体<sup>120</sup>から流れ出てくるのであり、自然的諸能動者 (agentia naturalia) は、ただその能動的知性実体からの諸形相を受け取るために質料を態勢づけるに過ぎないとしているのである<sup>121</sup>。

アヴィセンナのこの説に従ってもまた、〔分離した魂の認識についての〕この問題には困難がほとんどないように思われる。と言うのも、もし感覚が知性認識のために必要とされるのは、我々の魂が能動的知性実体へと向けられることによって、その知性実体から形象を受け取るために態勢づけられることのためだけであって、それ以外には必要がないのであれば、魂が身体から分離した暁には、魂は自らを自分で能動的知性実体へと向け、そこから可知的諸形象を受け取るようになるであろう。その時、感覚はもはや知性認識のために必要では

---

<sup>118</sup> Marietti 版と Robb 版は sensibilibus。 Leonina 版は sensibus。

<sup>119</sup> Avicenna, *De anima* V, 5 を参照。

<sup>120</sup> Leonina 版と Robb 版は intelligentia。 Marietti 版は intelligentia agente。

<sup>121</sup> Avicenna, *Metaphysica*, IX, 4 を参照。

なくなるであろう。ちょうど、海を渡るために必要であった船が、いざ渡ってしまえばもう必要でなくなるのと同様に<sup>122</sup>。

しかしながら、この説によるならば、人間は、感覚によってとらえる<sup>123</sup>事柄についての知識も、その他の事柄についての知識も、あらゆるものについての知識を<sup>124</sup>いっきに全部獲得するということになると思われる。なぜなら、もし能動的知性実体から我々の内へ流れ出て来る<sup>125</sup>諸形象によって我々が知性認識するのだとすれば、そして、このような流入を受け取るためには、その知性実体へ我々の魂を向けるだけでよいのだとすれば、魂は、その知性実体へと魂を向ければいつでも、あらゆる可知的形象の流入を受け取ることができるであろうからである。と言うのも、魂がその知性実体に向けられるのはあるひとつの形象だけのためであって、その他の形象のためではないなど言うことはできないからである。しかしそうすると、生まれつき盲目の人であっても、音響を表象する (*ymaginar*) ことによって、色彩やその他のあらゆる可感的なものの知識を得ることができるということになる。これは明らかに誤りである。

また、我々にとって感覚能力が知性認識のために必要であるのは、ただ知識を獲得することにおいてだけでなく、すでに得た知識を用いることにおいてもあることは明らかである。なぜなら、アヴィセンナは逆のことを言っているのだが<sup>126</sup>、我々は表象像に自分を向けることなしには、すでに知識を持っている事柄についてさえ考察することができないからである。表象像が収容保存

<sup>122</sup> Leonina 版と Robb 版では “*ei necessaria non est*” となっているが、Marietti 版では “*ei necessaria non potest*” となっている (イタリックは筆者)。異読の写本の註記はなく、Marietti 版より古い Vivès 版でも *est* となっているため、恐らくは誤植であると思われる。

<sup>123</sup> Leonina 版と Robb 版は *percipit* (現在)。Marietti 版は *percepit* (完了)。

<sup>124</sup> Leonina 版は *omnium scientiam*。Robb 版と Marietti 版は *omnem scientiam*。(イタリックは筆者)。

<sup>125</sup> Leonina 版と Marietti 版は *effluentes* (流れ出る)。Robb 版は *influentes* (流れ入む)。

<sup>126</sup> Avicenna, *De anima* V, 3 を参照。



されている感覚能力器官が損傷すると、すでに知識を持っている事柄についてさえ魂が考察することに支障をきたすのは<sup>127</sup>、そのためである<sup>128</sup>。

更にまた、上位の諸実体からの流入を通して神によって我々にもたらされる諸々の啓示においても、何らかの表象像が我々に必要であることは明らかである。だからこそディオニシウスは『天上位階論』第一章において、神の光は、多様な聖なるとばりに覆われて照らすのとは別の仕方では我々を照らすことはあり得ない、と言っているのである<sup>129</sup>。もし表象像が、ただ我々を上位の諸実体に向けるためだけに必要で、それ以外には必要がないのだとしたら、そうではないであろう。

それゆえ我々は、感覚的諸能力が魂の知性認識のために必要であるということ、別の仕方では言わなければならない。感覚的諸能力とは、プラトンが主張したように<sup>130</sup>、ただ刺激を与えるものとして付帯的に必要なものなのでもなければ、またアヴィセンナが主張したように、態勢づけるためだけに必要なものでもない。それらは、知性的魂にその固有の対象を提供するものなのである。アリストテレスが『デ・アニマ』第三巻に述べているように、可感的諸事

<sup>127</sup> Leonina 版と Marietti 版は “impeditur *usus anime/anima*e in condiderando.” Robb 版は “impeditur *visus anime* in condiderando.” (イタリックは筆者)。

<sup>128</sup> *QDV*, q. 10, a. 6, cor. および *In De anima*, III, 7 を参照 ( *In De anima*, III, 7, Leonina, u. 90-96: “Patet autem ex hoc falsum esse quod Auicenna dicit quod intellectus non indiget sensu postquam acquisiuit scienciam; manifestum est enim quod, etiam postquam aliquis habet habitum sciencie, necesse est ad hoc quod speculetur quod utatur fantasmate; et propter hoc per lesionem organi impeditur usus sciencie iam acquisite.” 「知性は知識を獲得した後には感覚を必要としないとアヴィセンナが述べていることが誤りであることは、このことから明らかである。人は知識の能力態を得た後にも、熟考することのために表象像を用いることが必要であることは明白だからである。器官の損傷によって、すでに得た知識を用いることが妨げられるのは、そのためである」)。

<sup>129</sup> Pseud-Dionysius Areopagita, *De Caelesti Hierarchia*, I, 2 参照。出版されている邦訳は、上智大学中世思想研究所編訳監修『中世思想原典集成』第三巻、大森正樹 監修「後期ギリシア教父・ピザンティン思想」(平凡社, 1994年) pp. 339-437「天上位階論」(今義博 訳)。

<sup>130</sup> Henle, *Saint Thomas and Platonism*, p. 42 [16] を参照。

物が感覚に対してあるように、表象像は知性的魂に対してある<sup>131</sup>。ところが、色彩が光によらなければ現実態において可視的なものとならないのと同じく、表象像も能動知性 (intellectus agens) によらなければ現実態において可知的なものとはならないのである<sup>132</sup>。このことは、自然的諸事物の生成について我々が主張していることと一致する<sup>133</sup>。すなわち、上位の作動因 (agentia superiora) は自然的諸作動因を媒介として自然的諸形相を生じさせると我々は主張しているが、それと同じく、能動知性は、能動知性によって現実態において可知的なものとした表象像によって、我々の可能知性 (intellectus possibilis) の内に知識を生じさせるのだと我々は主張するのである。この点に関しては、ある人々が主張しているようにこの能動知性が離在的実体であるのかどうか<sup>134</sup>、あるいは

---

<sup>131</sup> Aristoteles, *De anima* III, 431a14-15 を参照。Cf. *QL* VII, q. 5, a. 1, ad 3 (Leonina, u. 84-88): “. . . quamuis in actibus intellectiue partis non communicet corpus sicut instrumentum actus, communicat tamen sicut representans obiectum, quia obiectum intellectus est fantasma sicut color uisus, sicut dicitur in III De anima.” (「[魂の] 知性的部分の活動において、身体は、活動の器具として参与するのではないが、対象を提供するものとして参与する。なぜなら、『デ・アニマ』第三巻に述べられているように、色彩が視覚の対象であるごとく、知性的対象は表象像だからである」)。だがトマスは他の箇所では次のようにも述べている: *SSS* III, d. 31, q. 2, a. 4, ad 5 (Moos, p. 988, n. 156): “Non enim phantasma est obiectum propinquum et proprium intellectus, cum sit intelligibile in potentia, non actu; sed species intellecta est per se obiectum eius.” (「表象像は知性の直接的な固有の対象ではない。なぜなら、それは現実態として可知的なものではなく、可能的に可知的であるに過ぎないからである。自体的に知性的対象であるのは、知性的内に受け取られた形象である」)。また、次のようにも言っている: *STI*, q. 5, a. 2, cor.: “Unde ens est proprium obiectum intellectus; et sic est primum intelligibile, sicut sonus est primum audibile.” (「それゆえ有は知性の固有対象であり、したがってそれは、ちょうど音が聴覚にとっての第一対象であるように、知性にとっての第一対象である」)。後者のテキストの訳は、山田晶 編訳『世界の名著 トマス・アクィナス』(中央公論社、1980年)より。有 (ens) が知性の固有の対象であると述べられていることに関しては、同書 pp. 199-200, 註6の解説を参照。

<sup>132</sup> 上の註 131 に引用した *SSS* III, d. 31, q. 2, a. 4, ad 5 の言葉を参照。

<sup>133</sup> *QDV*, q. 11, a. 1, cor.; *SCG* II, c. 76 を参照。

<sup>134</sup> Cf. *QDA*, q. 5, cor., u. 113-115: “Et ideo plures posuerunt intellectum agentem esse substantiam separatam, intellectum autem possibilem esse aliquod anime nostre.” (「そしてそれゆえ、多くの人々が、能動知性は離在的実体であり、可能知性は我々の魂に属する何かであると主張したのである」)。この「ある人々」が誰を指しているのかについては、Leonina 版 *QDA*, q. 5, cor., adn. ad u. 113 (p. 40) を参照。

は、それは上位の諸実体のごとく我々の魂が分有している光であるのかどうかは<sup>135</sup>、問題ではない。

しかしながら、この立場をとると、分離した魂がいかなる仕方でも知性認識することができるのか<sup>136</sup>を知ることは、いっそう難しいものとなる。と言うのも、表象像はその知覚と保存のために身体的器官を必要とするのだから〔身体からの分離後は〕表象像はもう存在しないであろう。しかし表象像が失われると<sup>137</sup>、ちょうど色彩が失われると視覚はもう見ることができないのと同様に、魂はもう知性認識することができないのではないかと思われるからである。

この難問を解決するためには、魂が知性的諸実体の階層において最下位にあり、それゆえ、最低にして最弱の仕方でも知性的な光もしくは知性的な本性を分有しているに過ぎないということを考慮しなければならない。第一の知性認識者すなわち神においては、ただひとつの知性認識する形相によって<sup>138</sup>、すなわち神ご自身の本性によって、全てのものを知性認識する程に、その知性的本性は強大である<sup>139</sup>。それに対し、下位の知性的諸実体は多くの形象によって知性認識するのであるが、より上位のものであればあるほど、有する形相は少なく、またその少ない形相によってあらゆるものを知性認識できるような、より強い能力を有する。それゆえ、もし下位の知性的実体が、より上位の知性的実体が有するのと同じ程度に普遍的な諸形相を持つとしたら<sup>140</sup>、知性認識の能力が不

<sup>135</sup> 天使の内にある光については、*QDV*, q. 9, a. 1; *STI*, q. 106, a. 1 を参照。

<sup>136</sup> Leonina 版と Marietti 版は *possit* (現在)。Robb 版は *posset* (未完了)。

<sup>137</sup> Leonina 版と Robb 版は *eis autem sublatis*。Marietti 版は *quibus sublatis*。

<sup>138</sup> Leonina 版は *intelligentem*。Marietti 版と Robb 版は *intelligibilem*。

<sup>139</sup> 神は自らの一なる本性によって全てを知性認識する。この点に関しては、*QDV*, q. 2, a. 3, ad 3; *STI*, q. 14, a. 6, cor.; *STI*, q. 89, a. 1, cor. を参照。

<sup>140</sup> トマスはここで「形相」(*forma*)と「形象」(*species*)をほぼ同義に用いていると思われる。*STI*においてトマスは次のように述べている。「可知的形象(*species intelligibilis*)は知性に対して、それによって知性が認識を行なうものという関係にある」(*STI*, q. 85, a. 2, cor.: "... *species intelligibilis se habet ad intellectum ut quo intelligit intellectus*。")。「知性認識される事物の似姿、すなわち可知的形象こそ、知性がそれによってその事物を知性認識するところの形相である」(*Ibid.*: "... *similitudo rei intellectae, quae est species intelligibilis, est forma secundum quam intellectus intelligit*。")。また、「可知の形相」

十分であるために、その知識は不完全なものに留まるであろう。なぜなら、そういう〔能力に不相応な〕少ない形相によっては、ただ概観的に物事を認識するだけであって、自らの認識を個々のものにまで至らせることはできないであろうからである。

さて、人間の魂は〔知性的諸実体の中で〕最下位にある。それは知性認識することにおいて最小の力しか持たないのであるから、もしも離在的諸実体に適合するほどの抽象的で普遍的な諸形相を受け取るとしたら、魂は、何かしら概観的で混同した仕方でも物事を知るだけの、この上なく不完全な認識（*cognitio imperfectissima*）しか持たないことになるであろう<sup>141</sup>。それゆえに、人間の魂は、その認識が諸々の個物によって完全に判然なものとなるために<sup>142</sup>、真理の知識（*scientia ueritatis*）を個々の事物から集めなければならないのである。そのためにはしかし、それらの事物が、質料においてあるよりも<sup>143</sup>、より高度な状態で魂において受容されるために、能動知性の光がそこに現存している必要がある。それゆえ、知性的なはたらきの完全性のために、魂が身体とひとつになることが必要だったのである<sup>144</sup>。

（*forma intelligibilis*）という表現も多くの箇所に見られる（e.g. cf. *SSS* II, d. 3, q. 3, a. 2, cor.; *SSS* IV, d. 50, q. 1, a. 1, ad 6; *ST* I, q. 12, a. 5, cor.; *ST* I, q. 50, a. 2, ad 2.）。トマスにおける用語の解説として、M.D. Chenu, *Toward Understanding Saint Thomas* (Chicago: Henry Regnery Company, 1964), pp. 100-125, chap. III: “The Language and Vocabulary of Saint Thomas”を参照。

<sup>141</sup> Cf. *ST* I, q. 89, a. 1, cor.: “Si igitur animae humanae sic essent institutae a Deo ut intelligerent per modum qui competit substantiis separatis, non haberent cognitionem perfectam, sed confusam in communi.”

<sup>142</sup> Leonina 版と Robb 版は “*perficiatur et distinguatur.*” Marietti 版は “*perficiatur, et distinguatur.*” このコンマの存在を反映して、Marietti 版を底本とする Rowan 版は次のように訳している: “Hence in order that the soul’s knowledge may be perfect in its kind and bear directly upon singulars, . . .”

<sup>143</sup> Leonina 版は “*que sint in materia.*” Robb 版は “*quae sunt in materia.*” Marietti 版は “*quam sint in materia.*”（イタリックは筆者）。

<sup>144</sup> Cf. *ST* I, q. 89, a. 1, cor.: “Ad hoc ergo quod perfectam et propriam cognitionem de rebus habere possent, sic naturaliter sunt institutae ut corporibus uniantur, et sic ab ipsis rebus sensibilibus propriam de eis cognitionem accipiant. . . .”

だがしかし、身体的な運動変化や諸感覚の就労によって、魂が離在的諸実体からの流入を受け取ることが妨げられるということには、疑いがない<sup>145</sup>。だからこそ、啓示というものは人が眠っている時や感覚を失っている時に与えられるのであって、感覚を用いている時にはそれは起きないのである<sup>146</sup>。従って、魂が身体から完全に分離される時には、上位の諸実体からの流入をより豊かに受け取ることができるようになるであろう。そして、こうした流入によって、魂は、表象像なしに<sup>147</sup>知性認識することができるようになるであろう。これは、今はできないことである。しかしながら、このような流入によって生じる知識は、我々がこの世で感覚を通して得ている知識のように完全なものでもなければ、諸々の個物について明確なものでもないであろう<sup>148</sup>。ただし、今述べられ

<sup>145</sup> Cf. *Liber Sapientiae* 9. 15. (上の註 113 を参照)

<sup>146</sup> 感覚を失っている時に人間の魂が上位の諸実体からの流入を受け取るということに関しては、*QDV*, q. 7, a. 12, ad 3; *ST* I, q. 86, a. 4, ad 2 を参照。

<sup>147</sup> Leonina 版は *fantasmatibus* (複数)。Marietti 版と Robb 版は *phantasmate* (単数)。

<sup>148</sup> 分離した魂の認識が不完全なものであるに過ぎないということは、*ST* I, q. 89 においても明言されている (cf. q. 89, a. 3, cor.: “. . . anima separata per huiusmodi species non accipit perfectam rerum cognitionem, sed quasi in communi et confusam.”)。このような記述は、*QDA* や *ST* よりも以前の著作とされている *SSS* や *SCG* における、例えば次のような記述と食い違っているかのように見えるかもしれない。*SSS* IV, d. 50, q. 1, a. 1, cor.: “. . . unde cum actu erit a corpore separata, erit paratissima ad ad recipiendum influentiam a substantiis superioribus, scilicet Deo vel Angelis; et sic per huiusmodi influentiam cognitionem habebit majorem, vel minorem secundum modum naturalis capacitatis ipsius animae.” (「それゆえ、魂が現実態として身体から分離される時には、上位の諸実体すなわち神や天使たちからの流入を受け取るのに最適の状態になるであろう。そして、そのような流入によって、魂は、それぞれの自然的な能力に応じて、より大きい、あるいはより小さい認識を持つであろう」); *SCG* II, c. 81 (Marietti, #1625g-1626): “Unde et, quando totaliter erit a corpore separata, perfecte assimilabitur substantiis separatis quantum ad modum intelligendi, et abunde influentiam eorum recipiet. Sic igitur, etsi intelligere nostrum secundum modum praesentis vitae, corrupto corpore corrumpatur, succedet tamen alius modus intelligendi altior.” (「したがって、身体から完全に分離した時には、魂は知性認識の仕方に関しては完全に離在的諸実体と同じ様になり、それらの諸実体からの流入を豊かに受け取るであろう。従って、身体が滅びると、この世の生に応じた仕方での我々の知性認識は消滅するのであるが、それとは別の、より高度な仕方での知性認識がそれに替わるであろう」)。これらのテキストでは分離した魂の認識の不完全さが明確には述べられていないことから、既に述べたように、トマスが後期において自らの学説を変更したと解釈する研究者もいる(註 25 を参照)。しかしながら、



(1)<sup>152</sup> 第一の論に対してはこう言わなければならない。アリストテレスは、身体とひとつになっている限りにおける魂の知性的なはたらきについて述べているのである。すでに述べられたように<sup>153</sup>、その場合は、表象像<sup>154</sup>なしに知性認識はない。

(2) 第二の論に対してはこう言わなければならない<sup>155</sup>。魂が身体とひとつになっている現世の状態においては、魂が上位の諸実体から分有するのは、可知的諸形象ではなく、ただ知性的な光だけである。そのゆえに魂は、可知的諸形象をそこから受け取る対象として、表象像を必要とするのである。しかしながら、身体から分離した後は、魂は〔上位の諸実体からの〕可知的諸形象も豊かに分有するようになるであろう。そしてそれゆえ、魂は外的な諸対象をもう必要としないであろう。

(3) 第三の論に対してはこう言わなければならない<sup>156</sup>。先行する箇所から<sup>157</sup>明らかかなように、アリストテレスは、感覚と同じように知性も身体器官を有すると

<sup>152</sup> この異論解答は、Marietti 版では異論解答 2 となっている。Marietti 版における異論 1 は Leonina 版における異論 a にあたるが、この異論への異論解答 (Marietti 版の異論解答 1) は、Leonina 版では本文中ではなく異読の註 (adn. ad u. 418) の中に記載されている: “. . . ergo dicendum quod illa uerba Aristoteles dicit non secundum propriam sententiam, sed secundum opinionem illorum qui dicebant quod intelligere est moueri, ut patet ex his quae praemisit ibi.” (「次のように言わなければならない。アリストテレスが述べているその言葉は、彼自身の意見なのではない。それは、先行箇所から明らかかなように、知性認識は運動変化であると主張していた人々の見解である」)。

<sup>153</sup> 本問題の主文を参照。Cf. *QDA*, q. 8, cor.; *STI*, q. 84, a. 7, cor.

<sup>154</sup> Leonina 版と Marietti 版では *fantasmate/phantasmate*。Robb 版では *phantasia*。Leonina 版と Marietti 版では、この異論解答が対応している異論は内容が同じである (Leonina 版の異論 1, Marietti 版の異論 2)。しかし Robb 版では、この異論解答が対応している異論のテキストは Leonina 版の異論 c, Marietti 版の異論 3 (後半) にあたり、その異論では *fantasia/phantasia* という言葉が用いられている。

<sup>155</sup> この異論解答は、Marietti 版では異論解答 3 となっている。Marietti 版においてこの異論解答が対応している異論 3 は、Leonina 版では異論 b と異論 c にあたる。Robb 版では異論 1 にあたるが、それは Leonina 版における異論 c である。

<sup>156</sup> この異論解答は、Marietti 版では異論解答 5 となっている。

主張している人々の説について、そこでは述べているのである<sup>158</sup>。この説に基づくなら、分離した魂が知性認識することは全く不可能であろう。あるいはまた、アリストテレスは、我々が今この世において知性認識しているような仕方での認識について述べているのだと言うこともできる<sup>159</sup>。

(4) 第四の論に対してはこう言わなければならない<sup>160</sup>。魂が身体とひとつになっているのは、自らのはたらきのため<sup>161</sup>、すなわち知性認識のためである。しかしそれは、身体なしにはいかなる仕方によっても知性認識することができないからなのではなく<sup>162</sup>、すでに説明されたように<sup>163</sup>、自然本性的秩序において魂は、身体なしには完全な仕方では知性認識することができないからである。

(5) 第五の論に対する答えも、これによって明らかである<sup>164</sup>。

(6) 第六の論に対してはこう言わなければならない<sup>165</sup>。表象像は、能動知性の光によって現実態において可知的なものとなれない限りは、知性の対象とはならない。従って、現実態において知性の内に受け取られた可知的諸形象は、いかなるものであれ、またどこからのものであれ、対象が能力をそれに従って分

<sup>157</sup> Leonina 版では *premittit* (単数・能動)。Marietti 版と Robb 版では *praemittuntur* (複数・受動)。

<sup>158</sup> *STI*, q. 89, a. 1, ad 1 を参照。また *In De anima* I, c. 10 (Leonina, p. 51, u. 262-269) を参照。

<sup>159</sup> *QDV*, q. 19, a. 1, ad 7 を参照。

<sup>160</sup> この異論解答は、Marietti 版では異論解答 6 となっている。

<sup>161</sup> Leonina 版では “*propter suam operationem.*” Marietti 版と Robb 版では “*per suam operationem.*” (イタリックは筆者)。

<sup>162</sup> Leonina 版と Robb 版では *quin*。Marietti 版では *quia... non*。

<sup>163</sup> 主文 (Leonina, u. 407-410) を参照。

<sup>164</sup> この異論解答は、Marietti 版では異論解答 7 となっている。

<sup>165</sup> この異論解答は、Marietti 版では異論解答 8 となっている。



化する「対象としての形相的性格」(ratio formalis obiecti)を、それ以外には持たないであろう<sup>166</sup>。

(7) 第七の論に対してはこう言わなければならない<sup>167</sup>。能動知性と可能知性のはたらきが表象像と関わるのは、魂が身体とひとつになっている限りにおいてである。しかし身体から分離すると、魂は、可能知性〔のはたらき〕によって上位の諸実体から流出する諸形象を受け取るであろうし、能動知性〔のはたらき〕によって知性認識する能力を持つであろう<sup>168</sup>。

(8) 第八の論に対してはこう言わなければならない<sup>169</sup>。魂の固有のはたらきとは、現実態において可知的であるものを知性認識することである。そして、知性的なはたらきは、現実態において可知的であるものが表象像から受け取られたか、あるいは他から受け取られたかということによって種別されはしない。

(9) 第九の論に対してはこう言わなければならない<sup>170</sup>。分離した魂が知性認識するのは、自らの本質によってでもなければ、知性認識された諸事物の本質によってでもない。上位の諸実体から流入された諸形象によって知性認識するの

<sup>166</sup> 能力が対象によって分化されることに関しては、*STI*, q. 77, a. 3; *QDV*, q. 15, a. 2 を参照。また、対象を対象たらしめている「対象としての形相的性格」に関しては、*STI*, q. 1, a. 3, cor.; *STII-II*, q. 1, a. 1, cor. を参照。また Rowan 訳の註 (p. 202, note 19) を参照。

<sup>167</sup> この異論解答は、Marietti 版では異論解答 9 となっている。

<sup>168</sup> *QDV*, q. 19, a. 1, arg. 8 においてトマスは、本問題における異論 7 (*QDA*, q. 15, arg. 7) と同様の説を挙げており、その異論解答 (*QDV*, q. 19, a. 1, ad 8) では次のように答えている：「今魂のうちにある知性的な諸能力は、魂に自然本性的であるが故に、離在的魂においても同じものであるであろう。そこで、それら自然的なものは、すでに語られた通り、かのときには持たないような身体への関わりを、今は有しているけれども、(死後も) 存続しなければならない」(山本 訳)。これと関連する記述は *QDV*, q. 19, cor. および ad 1 にも見られる。

<sup>169</sup> この異論解答は、Marietti 版では異論解答 10 となっている。

<sup>170</sup> この異論解答は、Marietti 版では異論解答 11 となっている。

である。しかしそれは魂が〔身体から〕分離した後なのであって、プラトン主義者たちが主張したように魂の存在の初めからなのではない<sup>171</sup>。

(10) 第十の論に対する答えも、これによって明らかである<sup>172</sup>。

(11) 第十一の論に対してはこう言わなければならない<sup>173</sup>。身体とひとつになっている時に、もし魂が生得的な諸形象を有しているのであれば〔感覚を通して〕獲得した諸形象によって知性認識するのと同じように、魂はそれらの諸形象によって知性認識することができるであろう<sup>174</sup>。しかしながら、〔身体とひとつになっている時の方が〕確かに自らの自然本性においてはより完全なのではあるが、身体の<sup>175</sup>運動変化や感覚的な就労のために妨げられて<sup>176</sup>、分離後のように自由に上位の諸実体と結合して諸形象の流入を受け取ることができないのである。

(12) 第十二の論に対してはこう言わなければならない<sup>177</sup>。すでに述べられたように、流入された諸形象によって知性認識することは、身体とひとつになっている時には魂にとって自然本性的なことではない。それが自然本性的なことであるのは、身体から分離した後だけである<sup>178</sup>。

---

<sup>171</sup> この異論解答において言及されているプラトン主義者の思想の典拠については、Henle, *Saint Thomas and Platonism*, p. 42 [17] を参照。

<sup>172</sup> この異論解答は、Marietti 版では異論解答 12 となっている。

<sup>173</sup> この異論解答は、Marietti 版では異論解答 13 となっている。

<sup>174</sup> この見解は、*QDV*, q. 19, a. 1 では異論として取り上げられており (arg. 11 および arg. 12), トマスはその異論解答において、この見解を承認している: *QDV*, q. 19, a. 1, ad 11-12: "Alia duo concedimus." (「これら二つの異論を我々は承認する」山本 訳)。

<sup>175</sup> Leonina 版では *corporis*. Marietti 版と Robb 版では *corporeos*.

<sup>176</sup> Leonina 版では *retrahitur*. Marietti 版と Robb 版では *retinetur*.

<sup>177</sup> この異論解答は、Marietti 版では異論解答 14 となっている。

<sup>178</sup> *STI-II*, q. 5, a. 1, ad 2 および上の註 21 を参照。

(13) 第十三の論に対してはこう言わなければならない<sup>179</sup>。分離した魂もまた、以前身体の内得た諸形象によって知性認識することができるであろう<sup>180</sup>。しかし、すでに述べられたように、それらの諸形象によってだけでなく、流入された諸形象によっても知性認識することができるであろう。

(14) 第十四の論に対する答えも、これによって明らかである<sup>181</sup>。

(15) 第十五の論に対してはこう言わなければならない<sup>182</sup>。可知的諸形象は、ある時には可能知性の内に単なる可能態において在る。この時、人は可能的な認識者であるに過ぎず、教示や発見によって、それを現実態に<sup>183</sup>変える何らかのものを必要とする。また、ある時には、それらの諸形象は知性の内に完全な現実態として在る。この時、人は現実態として知性認識を行なっている。しかるに、ある時には、それらの諸形象は知性の内に可能態と現実態の中間的な様態において、すなわち能力態において (in habitu) 在る<sup>184</sup>。この場合、人は欲する時にいつでも現実態として知性認識を行なうことができる。獲得された可知的諸形象は、人が現実態として知性認識していない時には、まさにこのような様態において、可能知性の内に在るのである<sup>185</sup>。

---

<sup>179</sup> この異論解答は、Marietti 版では異論解答 15 となっている。

<sup>180</sup> Leonina 版と Robb 版は poterunt (未来)。Marietti 版は potuerunt (完了)。異読の註に poterunt は記載されておらず、Vivès 版でも poterunt となっているため、potuerunt は誤植である可能性がある。

<sup>181</sup> この異論解答は、Marietti 版では異論解答 16 となっている。

<sup>182</sup> この異論解答は、Marietti 版では異論解答 17 となっている。

<sup>183</sup> Leonina 版と Robb 版は in actu。Marietti 版は in actum。

<sup>184</sup> Thomas Aquinas, *Sentencia Libri De memoria et reminiscencia*, cap. 2, u. 92-97 を参照 (英訳は St. Thomas Aquinas: *Commentaries on Aristotle's "On Sense and What Is Sensed" and "On Memory and Recollection"*, Translated with introductions and notes by Kevin White and Edward M. Macierowski, Washington, DC: CUA Press, 2005, p. 192)。

<sup>185</sup> Cf. SSS III, d. 31, q. 2, a. 4, cor. (ed. Moos, p. 997, n. 147): "Et ideo [anima separata] ea quae prius scivit poterit considerare non quidem utendo phantasmate, sed ex habitu scientiae prius habito." (「そしてそれゆえ、〔分離した魂は〕まさしく、表象像を用いることなく、以前に得た知識の能力態 (habitus) によって、以前に知った事柄を考察す

(16) 第十六の論に対してはこう言わなければならない<sup>186</sup>。すでに述べられたように<sup>187</sup>、知性的なはたらきは、知性の対象である「現実態において可知的なもの」が、表象像から受け取られたものであるか、あるいは他から受け取られたものであるかによって、種において異なるわけではない。なぜなら、能力のはたらきは、その対象の形相的性格 (ratio formalis obiecti) に従って区別され種別されるのであって、対象における質料的な事柄に従って区別され種別されるのではないからである<sup>188</sup>。それゆえ、たとえ分離した魂が、自らを表象像へ向けることによってではなく、〔分離前に〕表象像から受け取られ<sup>189</sup>、知性の内に保存されている可知的諸形象によって知性認識するとしても、獲得されている諸形象によって生じるはたらきと、諸形象が獲得されるころのはたらき<sup>190</sup>との間には、種における相違はない。

(17) 第十七の論に対してはこう言わなければならない<sup>191</sup>。可能知性が表象像から〔諸形象を〕受け取るように生まれついているのは、上位の諸実体の光の何らかの分有である能動知性の光によって<sup>192</sup>、それらの表象像が能動態になって

ることができるであろう」。知識の能力態が分離した魂の内に保存されることは、次の箇所にも述べられている：STI, q. 89, a. 5, cor.; STI-II, q. 67, a. 2, cor.

<sup>186</sup> この異論解答は、Marietti 版では異論解答 18 となっている。

<sup>187</sup> 異論解答 6 と 8 を参照。

<sup>188</sup> STI, q. 89, a. 5, cor.; STI-II, q. 67, a. 2, cor. を参照。対象の形相的性格とは、さまざまなものをあるひとつの観点からの考察の対象たらしめているような形相的な側面のことである。山田晶編訳『世界の名著 トマス・アクィナス』pp. 89-90, 註 4 と註 5 を参照。山田晶は次のように解説している：「質料的側面においてみれば同一のものが、対象の形相的性格の異なりに応じて異なる学の対象となる。たとえば同じ人間が、医学、生物学、法律学、等の異なる学の対象となる。また質料的側面において異なるものが、対象の形相的性格が一ならば同一の学の対象となる。たとえば、水、電気、星が一つの物理学の対象となる」（註 5）。

<sup>189</sup> Marietti 版には *acceptas* の前に *prius autem* が挿入されている。

<sup>190</sup> Leonina 版と Robb 版は *operatio*。Marietti 版は *operationi*。

<sup>191</sup> この異論解答は、Marietti 版では異論解答 19 となっている。

<sup>192</sup> Cf. *In De anima* III, 4, u. 162-164; STI, q. 84, a. 5, cor.

いる限りにおいてのみ<sup>193</sup>である<sup>194</sup>。従って、可能知性が上位の諸実体から〔諸形象を〕受け取ることができるということは排除されない<sup>195</sup>。

(18) 第十八の論に対してはこう言わなければならない<sup>196</sup>。身体とひとつになっている状態における限り、魂において知識は自然本性的に表象像によって得られる。そしてこの状態にある限り、知識が上位の諸作動因 (*superiores agentes*) のみによって得られることは不可能である。しかしながら、魂が身体から分離した後には、それが可能となるであろう。

(19) 第十九の論に対してはこう言わなければならない<sup>197</sup>。離在的諸実体が有する知識が、我々の魂に相応していないということから帰結するのは、魂がそれらの諸実体からの流入によっては何の知的洞察 (*intelligentia*) も得ることができないということではない。すでに述べられたように<sup>198</sup>、帰結するのは、魂が完全に明晰な知識洞察を得ることはできないということだけである。

---

<sup>193</sup> Marietti 版では *nisi* ではなく *nihī* となっているが、これは恐らく誤植と思われる。

<sup>194</sup> 異論解答 6 を参照。

<sup>195</sup> Leonina 版の註 ( *adn. ad u. 518-520* ) を参照。

<sup>196</sup> この異論解答は、Marietti 版では異論解答 20 となっている。

<sup>197</sup> この異論解答は、Marietti 版では異論解答 21 となっている。

<sup>198</sup> 主文 ( *Leonina, u. 408-409* ) を参照。